

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立峰山小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。		○教科等学習における学び合いや自ら考え諸問題を自律的に解決する児童活動が充実したことにより、児童の良好な関係性や自律的な判断力・行動力を高めることができた。 ○不登校(傾向)児童への支援、愛着形成不全等の心理的課題や発達障害等への支援が充実したことで、学校不適応(特に不登校)の状況が改善した。 △愛着形成に課題のある児童や、貧困等の厳しい状況にある家庭へのケア・支援をさらに工夫する必要がある。	全ての児童がつながりながら、将来の社会的な自立を目指して力を伸ばし合う学校づくりを行う。そのため、 ①学び合う子 ②高め合う子 ③認め合う子 を目指す児童像とし、身に付けさせる力の具体的目標を6点設定して学校経営を進める。 それらに取り組む重点的な場を「①学習指導 ②児童活動 ③児童支援」とし、全ての教職員が分掌して目標の達成に迫る。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、 各学級の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	①伝え合い、話し合い、学び合いによる教科指導を実践し、児童同士のかかわり合いの中で学ばせる。 ②認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業づくりを研究重点とし、組織的に実践的な研修を行う。 ③電子黒板やタブレット端末等のICT器機を効果的に活用し、児童の学び合いを一層深める。 ④授業改善や効果的な家庭学習等について峰山学園内小・中学校と連携して取り組み、教職員が相互に学び合う。	○目指す授業を明確にした授業研究を進めたことで、「わからないことは聞いたり人と考えたりしている」「話し合うと授業がよく分かる」と90%程度の児童が感じている。 ○できないことにもあきらめずに取り組もうとする児童が90%になるなど、非認知能力として重点的に目標設定した学ぼう力の向上が見られた。 ○ICT機器の活用により、児童の興味・関心が高まり主体的に学ぼうとする意欲の向上につながった。 △主体的に学びに向かう意欲を向上させ確かな学力を身に付けることができるよう授業改善を進める。また授業での学びが家庭学習につながるよう研究を進める。
	生徒指導	①児童自らが考え、話し合い、判断し、問題を解決する自律的で自治的な活動(特に特別活動)を全校で展開する。 ②不登校や学校不適応の未然防止に向け、毎週1回の児童支援会議を行い、学習指導・教育相談・特別支援等の多面から計画的・総合的な児童支援を進める。 ③スクールカウンセラー、児童養護施設、医療、福祉等との情報連携・行動連携の質を高める。 ④峰山学園内での校種間連携を強化し、早い段階からの移行支援に取り組む。	○えがおスポーツパーティや秋祭り等、児童自らが考え学年を超えて仲間と共に課題解決する取組を進めたことで、「周りの人の頑張りが良いところを見つけている」「目標に向かって友達と協力して頑張っている」「他の学年にも中の良い友達がいる」と90%程度の児童が感じている。 △不登校等の未然防止や解消に向けた組織的対応を行っており、改善しているケースもある。しかし、今なお厳しい状況にあるケースもあり、不適応・不登校(傾向)の解消に向けて、専門家等と連携しながら取組を強化する必要がある。 △いじめの未然防止、再発防止に向け、人権学習を基盤とした心の教育を専門家の活用も図りながら組織的に進めていく。

健康（体育）・安全	○心身ともに健康な生活に自ら取り組む意欲と態度を育て、望ましい生活習慣を確立させる。 ○交通事故防止を徹底し、児童の安全を守る。	①望ましい生活態度や健康づくりに向けて、児童が自分の生活を振り返り、考えることができるよう生活習慣に関する指導を、すべての学年で計画的に行う。 ②SNSやオンラインゲーム等の問題に関して、PTAや峰山学園と連携し、児童・保護者の学習・研修・啓発を進める。 ③登下校の安全確保と事故防止に関して、地域の安全ボランティア組織と連携した取組を進める。	○非行防止教室や歯磨き巡回指導等、外部講師による専門的な指導を実施できたことで、自らの健康や安全について振り返り考えさせることができた。 ○PTAや安全ボランティア組織と緊密に連携し、登下校や校外での重大事故は本年度も0件となった。 △ゲームやSNSの使用法については家庭や専門機関との連携を図りながら、自らコントロールできる力を付ける必要がある。
特別支援教育	○将来の社会参加に向けた自立を支援するという立場から、児童一人一人の教育的ニーズを整理し、すべての児童が自分らしさを伸ばし合える環境をつくる。	①「多様性を尊重する」という方針の下、全ての児童が参加し力を伸ばし合える学習指導や集団活動を追求する。 ②校内に適応指導教室・特別支援教室（学習ルーム）を設置し、必要に応じて個別の支援を行う。 ③特別支援学級では、個々の児童に応じた支援計画と教育課程をつくり、地域と連携した生活単元学習（各教科等を合わせた指導）を中心に得意を伸ばす指導をする。 ④保護者と定期的な懇談を行い、合意形成を図りながら、一人一人に応じた合理的配慮を行う。	○「相手の気持ちを考える」「なんでも聞いてくれる友達がいる」などと考える児童が90%程度おり、他者理解が進んだり児童同士の結びつきが強まったりした。 ○特別支援教育への保護者の理解と信頼が深まり、特別支援学級や通級指導教室に対するニーズが高まった。 △通常の学級における個に応じた支援が途切れないよう、6年間を通して一貫した支援を進める必要がある。 △愛着形成に課題のある児童や、貧困等の厳しい状況にある家庭へのケア・支援をさらに工夫する必要がある。
開かれた学校づくり	○峰山学園、保護者や地域社会との連携・協働を通して、教育活動を工夫改善し、児童の学びを深める。	①地域性を生かし、地域の人材を活用した学習活動を創意工夫して実施する。 ②保護者や地域に対して、本校の方針や教育活動についてホームページ等を通して発信する。 ③学校評議員、学校関係者評価委員、峰山学園運営協議会の意見・評価から学校経営等を改善する。	○峰山町の伝統や産業等、自分たちの住んでいる地域に向き様々な方々から話を聞き学び地域への愛着を高めることができた。また外部講師として地域の方々を招聘し農業や伝統芸能等について学んだり、子どもたちの学校での様子を知っていただいたりすることができた。 ○授業参観やホームページ、学校便り等を通して保護者や地域の方々に発信することで学校の様子を知っていただくことができた。 △教育目標実現に向けた行事や取組のねらいについて更に理解が進むよう丁寧に発信をしていく必要がある。
次年度に向けた改善の方向性	(1)認知能力と非認知能力を一体的に育む指導を一層進めることにより、学びに向かう力を高め、学力格差を改善する。 (2)児童の自律的・自治的な活動を学校全体に根付かせ、自ら生活をよりよくするために考え判断し、協働して問題を解決する力を一層高める。 (3)一人一人の児童のニーズに応じた適切で効果的・継続的・計画的な指導・支援を全ての教職員が行うため、年間を通して実践的な研修を行う。 (4)全ての児童に学校での学びを保障する観点から、児童個々の特性・特質・差異・選択を尊重し、不登校、いじめ、家庭の貧困や教育力の課題などに対し関係機関と連携したチーム支援を一層強化する。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立いさなご小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)			
教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 目指す子ども像 1 意欲を持って自ら学ぶ子ども 2 思いやりのある子ども 3 進んで心と体を鍛える子ども		コミュニケーション能力の育成を柱として、すべての教育活動に位置付けてきた。その結果、自分の思いを相手に伝えられる児童が増え、人と関わる良さを感じられるようになった。しかし、安定した学級経営の下で規範意識の向上、思いやりの心の育成を目指したが不十分なところもある。一人一人の良さを生かした指導を行い、「お互いを認め合う」学級づくりを進める。自分の居場所があり、安心できる学級を支えにして授業づくりを進める。		目指す子ども像を具体化する重点 1 自ら考え判断し、表現する力を向上させる。 2 自らの時間と力を周りの人々のためにもつかい、他者に貢献する態度を育てる。 3 自らの目標を設定し、自分で調整しながら根気強く、やり抜く力を育てる。 4 保護者、地域から信頼される学校づくりを推進する。			
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題（自己評価）	
各学園の重点等 を基盤として 学校教育指導の重点、 幼稚園・小学校・ 一貫教育の諸計画 及び	教育課程 学習指導	1 目標（評価）が明確で児童に分かりやすい授業を計画的に進める。 2 基礎学力の定着と確かな学力の進展を図るため、1時間のねらいを明確にし、その時間に教えきる。		1 コミュニケーション能力の育成を柱とし、ねらいが明確で児童が分かる授業を研究授業等によって教員が学び合う。深い学びになる指導と評価、ICTを活用した授業づくりの研究を通して目指す資質・能力を伸ばす。 2 学習意欲が持続するような手立てを工夫しつつ、1時間で指導しきり、習得させる。学び合いや振り返りについても、どこまでをねらうのかゴールを明確にする。		○授業のねらいを達成するため、自分の考えを伝え相手の意見も取り入れて考えが深められる授業の研究を行った。意見交流にはICTを効果的に活用できた。 ○めあての提示や授業展開を工夫し、授業に向かう意欲や興味を高め、何を学習するのか明確にできた。 △家庭学習の目的を児童が自覚し、自主的に学習するための指導を継続する。	
	生徒指導	1 いじめ防止、不登校未然防止となる取組を進める。 2 自己存在感・共感的な人間関係・自己決定の場を積極的に取り入れ、安心・安全な居場所にし、お互いを認め合う集団をつくる。 3 自分の力と自分の時間を周りの人のために使うことを価値付けする。		1 道徳や特別活動等を通して、自分の思いを伝えたり、友達の意見を受け入れたりして望ましい人間関係をつくり、いじめを生まない学級づくりを行う。 不登校を未然防止するために、居心地のよい学級・学校を目指し、児童同士の関係作りや児童と担任の信頼関係を築く。 2 授業づくりを通して学級づくりを行うことを全教員で確認し、授業の中でペアやグループで対話する場面を設定する。また、日々の肯定的評価を積み重ね、自己肯定感を高めるとともに、お互いの良さや自分との違いを認め合える（受け入れる）集団づくりを進める。 3 学級活動や異年齢集団での活動における、行動価値として、他者貢献の視点を常に伝え積み重ねていく。		○「ちがいがあって当たり前」の考え方を基本とし「楽しい」と思える学校・学級づくりに努めた。 ○何でも話せる雰囲気醸成し、困ったことは担任・友達に伝えると解決できる体験を重ねた。 ○結果に至るまでの過程を重視し、子どもの取組を認めて肯定的評価を続けたことにより、自分のがんばりや成長を自覚できた。 ○異年齢活動では、6年生がねらい達成のための内容や方法を考えて取り組んだ結果、下級生から「ありがとう」「うれしかった」と聞き、成功体験として実感できた。 ○異年齢活動の成果により、学年交流遊びを計画した。相手意識をもった活動を行い、達成感を味わった。	

健康（体育）・安全	1 全校的な感染症予防や体力にかかわる取組の充実と積極的な児童への指導、保護者への啓発により、自分自身の身体に関心を持たせる。 2 困難なことにもねばり強く挑戦していこうとする態度を育成するために、自分で目標設定できる力を付ける。	1 健康安全部が中心となり、感染症予防の取組を継続的に行う。（各学期の1回の保健指導）平時の場合と感染が広がりつつある場合の行動を考えさせ、感染予防に努める。感染予防できる方法を工夫し、体力向上と粘り強く頑張ろうとする心を育てる。 2 学級、学校での取組において個々のめざす目標を発達段階に応じて明確にし、自分の目標を数値化し、具体的な目標に向かって、ねばり強く挑戦する態度を高める。目標達成だけが成長したととらえるのではなく、達成していなくても見えない成長があると認めていく。	○人数制限や感染対策をとりながらの活動ではなくなったが、コロナ禍前の朝マラソン等の取組に戻さずに、体育の時間を使つての持久走、縄跳びで自分の目標に向けて努力できた。 ○自分で目標を設定して取り組むことができた。目標達成への過程を振り返ることにより、目標達成に届かなくても成長できたと感じる児童が増え、意欲が持続した。 △結果がすべてではないとわかっているが、できなくてあきらめてしまうことも多い。できなくても挑戦してみようという学級の雰囲気をつくっていく。
人権教育	1 規範意識を身に付けさせ、いじめを許さない心を育て、行動できるようにする。 2 発達段階に応じた仲間意識を育成する指導を進める。	1 全教育活動を通して道徳教育・人権教育の推進、規範意識の醸成によりいじめの防止を行う。日々の小さな事象を見逃さない気づく力を高め、未然防止に努める。また「他者への思いやり」については相手意識を持たせた指導を行う。 2 互いの個性や価値観の違いを認め、得意なこと認め、違いがあるから友達と協力することに意義があることを実感させ、自分に自信を持ちさらに良さを伸ばす指導を行う。	△「いじめはいけない」とわかっている児童がほとんどであるが、深く考えずに行動し、人の嫌がることをしてしまうことがある。その都度、それぞれの思いを聞き、相手のことを考えさせる指導を続ける。 ○個の良さ、得意なことが発揮できる場を設定し、やってよかったと思えるような取組を行った。 ○「さらによくなるように」という視点で取組や行動を振り返り、質の向上につながられた。
研修（資質向上）	1 職員の指導力向上に向けた研修を積極的に進める。 2 峰山学園が目指す保幼小中10年間の連続した学びと育成を目指した研修を進める。	1 峰山学園における研修会、校内の授業研修会等をおして、職員の指導力向上に向けた研修を行う。校内研修では、児童の見方や支援の方法を研修し個別指導に活かす。適宜評価を行い、日々の実践と結びつけた価値づけを行う。 2 峰山学園の「(0)Ⅰ～Ⅲ期における「目指す姿」を共有し、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための視点についての研修を進める。校内研では、グループでの協議も組み入れ、教員同士が学び合える環境を作る。	○2学級ある学年は学年で授業研究を行った。研究するグループの構成を工夫し、学年の系統について学び合えた。 ○峰山学園の授業研究では、しんざん小の実践から、自分や自校の実践と比較したり、峰山中での実践から、中学校へのつながりを考えたりできた。 △学習内容が分かり、より深く学べるためにペアやグループで伝え合うことを取り入れた授業づくりについて研究を継続する。
次年度に向けた改善の方向性	・変化し続ける社会に対応できる思考力・判断力・表現力を育成するための指導について研究を継続する。 ・児童が主体となる授業や特別活動を連動させ、何でも話せて安心して学び合える学級集団をつくる。 ・スクールカウンセラーなどの外部機関と連携し、方向性を明らかにしたうえで、個別に適切な支援を行う。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立しんざん小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学園 2 「中学校卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学園 3 保護者・地域に信頼される学園		○ 生徒指導の視点を生かした学級経営により落ち着いた教育環境づくりができ「学校が楽しい」の項目では、93%が肯定的回答となった。 ○ 個別に配慮を要する児童への専門機関と連携した取組を進め指導・支援を行った。また保護者と定期的な面談等を行い支援の共通理解を図り、不適応等の未然防止に努めた。 △ 「自分にはよいところがある」の項目では肯定的な回答が78%であった。より自己肯定感が高まるような指導や取組を大切にしたい。		『自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成』 ○ 考えて行動できる【思考】 ○ 自分で判断できる【判断】 ○ 自分なりに表現できる【表現】 ○ やさしい言葉を使う【言葉】
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として 学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1、2を通して ○ 重点研究として国語科を設定し、児童の学びたい意欲を引き出し意見や考えを伝え合ったり表現したりする力を伸ばす授業づくりの理論的・実践的に進める。 ○ 初任者研修、2年目研修等を効果的に活用し、経験年数や課題意識に応じて実践力を高められる研修を積み重ねていく。 3 これまでの授業実践を踏まえて、家庭学習での活用を具体的に進める。		○ 研究授業や学園の公開授業を計画的に行った。また、理論的に学ぶ研修の機会を設定し、理論的、実践的に授業研究を深めることができた。 ○ 個々の教員の課題意識等に応じた研修等への参加を積極的に促し、校内での波及に努めた。 ○ 日常的にタブレット端末を持ち帰り、家庭学習での活用が進んだ。 △ 授業観・指導観の転換についての意識は徐々に高まってきたものの「探究的な学び」の具体については、次年度の中心的な課題の一つとなる。
	生徒指導	1 子ども自身の思考や判断、その子どもなりの表現を促すために、児童の声を傾聴すること、自己決定を促すこと、その子に応じた支援をすることを大事にする。 2 人権教育を教育活動の基盤とし、日々の授業や教育活動を通して、相手の立場に立った望ましいコミュニケーションができる行動を促し評価することを繰り返していく。 3 児童に目標や見通しを持たせる計画を丁寧に共通確認する。取組過程において肯定的な評価を繰り返し児童の自己肯定感を高める。		○ 毎週の会議時や日常的な情報共有を徹底し、問題事象や保護者対応、不登校の未然防止等、基本的には迅速・適切に対応することができた。 ○ 学期ごとに児童アンケートを実施し結果を児童や保護者に返すことで、次の目標設定や見通しを持つことにつなげた。 △ 個々の児童の家庭的な背景、教員の指導の問題等により、学級や学校に不適応を起こす児童のケースが複数あった。今後も継続課題である。 △ 保護者アンケートの「いじめ防止の積極的な取組」について、「よく分からない」が27%と高く、いじめアンケート等の結果により丁寧な周知が

	健康（体育）・安全	1 年間を通した体力向上の取組を進める。 2 交通安全、熱中症予防に事故防止を徹底する。	1 学校行事や日々の教育活動と連動し、また、「体育指導力向上指定校」の取組を有効に活用し体力向上を図る。 2 地域の特性に鑑み、日々の交通安全には学校体制で細心の注意を払って対応する。熱中症等予防について教職員で指導と対応を共通理解し徹底する。	必要である。 ○「体育指導力向上指定校」の取組を生かし、体育授業における ICT 機器の積極的な活用や年間を通した体力づくりを行った。 ○ 事故や怪我の予防に積極的に努めたが、様々な理由により心身の不調を訴える児童が多くいる。
	(A) 人権教育	1 児童や保護者・家庭、地域の状況を把握し、全ての教育活動に人権教育の視点を反映させる。	1 児童や家庭・地域の実態を丁寧に把握し、一人一人の児童が安心・安全の中で学校生活を送れるようにする。全教職員の人権意識を高め、一致した視点で指導や支援を行えるよう管理職が指導助言をしたり価値づけをしたりする。	○「言葉を大事にする」ことを目指す児童の姿に位置付け年間を通して日々の声かけをし、いじめやトラブルの未然防止に努めた。 ○ 様々な背景により自己肯定感の低い児童が多く見られ、次年度も継続的に取組を進めたい。
	(B) 特別支援教育	1 知的、自閉・情緒、病弱学級があることを生かし、特別支援教育の視点を全教育課程に反映させる。	1 3 学級間で連携した取組、交流学級と連携した取組を効果的に設定する。また、全校児童の中で大事にされる理解教育を推進する。保護者と定期的な面談を行い、その児童、保護者の願いを踏まえた支援計画を作成し、個に応じた支援を行う。	○ コーディネーターを中心として、支援学級に在籍する児童、通常の学級に在籍する支援が必要な児童への支援を組織的に行った。 ○ 就学相談について、保護者との連携を丁寧に図ることができた。
次年度に向けた改善の方向性	・ 「考えて行動する力を伸ばす」ことを中心に、一人一人の児童に応じた判断や表現ができ、将来生きていく力を伸ばすことに教育活動全体を通して取り組む。 ・ 「探究的な学び」の具体について、1 学期早い段階でイメージを共有し、各教科等において授業改善を進める。 ・ 全ての児童が安全で安心して学校生活を送れるよう、いじめ予防や学級経営、生徒指導の充実を図る。また、日常的な情報共有を徹底し、必要に応じて学級への支援を組織的に行う。			

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立長岡小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」に迫る。		○学校教育目標の理念を機会あるごとに伝え、価値付けすることで教職員、児童ともに浸透してきた。 ○気になる児童や事象について組織的に早期対応を行う中、大きな生徒指導事象はなく、不登校傾向児童もいない。 ○高学年を中心にICTの利活用が進んだ。冬季休業中は全学年タブレットを持ち帰り活用した△学園の各期における指導の系統性について意識化を図り「主体的・対話的で深い学び」の実現を追求する。 △PTAや保護者と連携してSNSの利用の仕方や就寝時刻について考え、よりよい生活習慣の確立を目指す。 △特別支援教育について、保護者や児童への理解教育を進めると共に個々のニーズに応じた指導・支援を追求する。		学校教育目標「ちがいを認め合い、笑顔あふれる学校」 人権尊重を基盤とし、あらゆる教育活動を通して、一人ひとりを大切にしたい教育を推進する。 1 人を思いやる豊かな人間性の育成 2 一人ひとりを大切に個性や能力を最大限に伸ばす指導（発達支持的生徒指導） 3 確かな学力・コミュニケーション能力の育成(個別最適な学び・協働的な学び・探究的な学びの推進) 4 たくましく健やかな心身の育成 5 安心・安全で信頼される学校づくり（環境整備、保護者・地域連携）	
評価項目		重点目標		具体的方策	
学校教育指導の重点、各学級の重点等を基盤として 保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1 「主体的・対話的で深い学び」の実現と探究的な学びに向けての授業づくりを追究する。 2 振り返りを重視し、自己調整力を育成する。 3 目標と指導と評価の一体化を図る。 4 ICTのより効果的な活用を推進する。		1 学園の指導目標と視点を踏まえて、各期における指導を系統的に進める。また、各教科における探究的な学びについて分掌主任が中心となり研修を行う。 2 自分を見つめ直す場を設定し、成長や効果的な学習方法等に気付かせる。 3 児童実態に応じた目標を設定し、ゴールを明確にした授業づくりを行う。 4 ICTの授業や家庭学習での利活用について研修の機会を設ける。	
	生徒指導	1 人を思いやる豊かな人間性を醸成する。 2 発達支持的生徒指導を全教育活動で推進し、不登校傾向やいじめ事象等の未然防止、早期発見、早期解消に努める。		1 教え合い助け合う児童同士のつながりを通して、誰もが安心して生活でき居場所のある学級、学校づくりを進める。 2 児童が主体となる活動を仕組むと共に、一人ひとりを大切にして、全教職員で全校児童を育てることを意識化する。また、生徒指導部、教育相談部、いじめ防止委員会の機能化を図る。	
				成果と課題（自己評価） ○△教え合いを通してつながる授業づくりができた。「主体的・対話的で深い学び」の実現や探究的な学びに向けての授業づくりを更に追究する。 ○△特別活動では、常に振り返りをしながら取組を進めてきた。授業でも時間の設定をして自己調整力を育成していきたい。 ○どの学年もめあてを提示し、児童に見通しをもたせて授業ができた。 ○ICTの活用は、特に4年生以上で積極的にできた。長期休業中は全学年タブレットを持ち帰り復習や自由研究等で活用した。 ○学校教育目標「ちがいを認め合い笑顔あふれる学校」の理念を機会あるごとに伝え、価値付けすることで、思いやりのある行動や、全校児童で楽しく遊んでいる様子を多く見ることができた。 ○年間を通して児童が主体となる行事や取組を行い達成感を感じさせることができた。 ○気になる事象については情報共有を図り組織的に早期対応を行った。大きな生徒指導事象はなく、不登校傾向児童もいない。	

健康（体育）・安全	1 体を動かすことを楽しみ、体力づくりやスポーツに親しむ態度を育成する。 2 家庭と連携して基本的な生活習慣を確立させる。 3 危機管理の充実や環境整備による安心・安全な学校づくりに努める。	1 中間マラソンや縄跳び等、目標を明確にした体力づくりの取組を充実させる。 2 生活がんびり週間を活用し、家庭と連携しSNSの使用時間や就寝時刻を考える等、健康的な生活習慣を確立させる。 3 年間4回の避難訓練を実施し、状況に応じた身の守り方を学ばせる。また、毎月安全点検を行うとともに、家庭や地域と連携し、安心安全な登下校を目指す。	○事前に目標を設定させたことで、各自が目標に向かって取り組むことができた。 △生活がんびり週間を年間3回設定したり、PTA本部役員に協力していただき便りを発行したりしたが、ゲームの時間や就寝時刻は、なかなか改善できなかった。 ○計画通りに避難訓練を実施し、状況に応じた避難の仕方を学ばせることができた。毎月の安全点検やニコニコカーでの保護者による登下校の見守り活動が、年間を通して実施できた。
人権教育	1 人権尊重を基盤とした学校経営を推進し、教職員の人権意識の高揚を図る。 2 違いを認め合い、多様性を受け入れ、誰とでも仲良くできる児童を育成する。 3 人権について考える機会を設定するとともに、保護者への理解を深める。	1 学校教育目標に立ち返り、適宜研修を行い、教職員に人権尊重を意識させる。 2 違いを認め合い、教え合い助け合う中で、また、異年齢活動を通して、居心地のよい学校・学級づくりを進める。 3 人権旬間や人権月間で課題に応じたテーマを設け取り組む。また、学校・学級だより等や授業公開を通して保護者等に啓発・発信をする。	○校内研修や新聞記事等から自身を振り返る機会を適宜設け、教職員の人権意識の高揚を図った。 ○児童会活動等で「誰もが楽しめること」を考えて取組を計画することが定着した。 ○△人権旬間や人権月間等を計画的に進めた。友達の良い所をたくさん見つけたり、視覚障害者の方の講話により障害に対する理解を深めたりすることができた。学校だよりやホームページで発信したが、授業公開は実施できなかった。
特別支援教育	1 特性（個性）への理解を深め、助け合える好ましい人間関係を築く。 2 特性に応じた指導・支援の方法を追求する。 3 保護者や関係機関と連携し、適切な就学指導を進めていく。	1 学級開きや人権学習を通して様々な障害に対する理解教育を行う。 2 発達障害等、個別の支援が必要な児童への効果的な支援方法を他機関と連携して追求していく。 3 保護者との定期的な懇談を実施し、保護者の願いを反映させた個別の教育支援計画を作成するとともに、適切な就学について共に考えていく。また、他機関と連携し、コーディネーターを中心に校内組織の機能化を図る。	○学級開きや朝会等の講話で理解教育を行い、互いを認め合う雰囲気醸成された。 ○市の臨床心理士や丹後地域教育支援センターの巡回相談等により、支援を要する児童の効果的な指導や支援の方法を学んだ。 ○△コーディネーターが中心となり懇談前に打ち合わせを行った。保護者に児童の様子や効果的な支援を伝えることができた結果、良好な関係を保ちながら懇談を継続することができたが、特別支援学級への入級に同意が得られなかった家庭もある。児童や保護者の気持ちに寄り添った就学相談を今後も継続していく必要がある。
次年度に向けた改善の方向性	1 各教科の「見方・考え方」を意識しながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現や探究的な学習について協働的な研究を推進する。また、振り返りを重視し「自己調整力」の向上を図る。 2 PTAや保護者と連携してSNSの利用の仕方や就寝時刻について考え、よりよい生活習慣の確立を目指す。 3 特別支援教育について、保護者や児童への理解教育を更に進める。また、外部と連携して個々のニーズに応じた指導や支援の方法を学び指導に生かすとともに、保護者や児童の気持ちに寄り添った就学相談を進めていく。		

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立大宮第一小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
「学校教育目標」(長期目標) ◆自他を尊重し、自ら学ぶ こどもの育成 「目指す学校像」 ◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校 【児童】 ◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校 【教職員】 ◇安心して子どもを任せられる学校 【保護者】 ◇他の地域に誇れる地域とともにある学校 【地域の方】		○2～6年のDRTの結果、昨年比同等以上が国語248人75.2%、算数239人72.9%となり、算数では目標に達成しなかったが、全体としてテストに現れる力を多くの子が伸ばすことができた。 ○話し合い活動について各学級で研究を進め力をつけ、授業や学級での話し合いに生かしていくことができてきている。また、ICTの活用がさらに進み、まとめたり表現したりする学習での活用ができてきている。 ○特別活動の異年齢活動等を活用し、協調性・自制心・やり抜く力などが身につけてきている。日々の学級経営の中で肯定的な評価を大切にすることで、自己肯定感を高め、心理的安全性のある学級づくりが進められた。 ※学力差に対応し、全体指導と個別の結果から指導内容を見つめなおしていく。 ※コロナの影響による体力・心理両面からくる影響に対して、可能なことでの取組を検討していく。	<u>「一人ひとりが自分の良さを発揮し、将来の自立に向けてつながりながら力を高めることができるような学校経営を行う」</u> ・子どもたちをつなぎ、「心理的安全性」のある学級を目指す。(特別活動の研究そのものであり、そこから将来に向けた子どもの自立を進める。) ・コロナの影響による、子どもの心理面、身体面の成長を常に意識する。 ・保護者との丁寧な連携を進め、集団の中で生きる力を伸ばす観点で理解を得ていく。 ・昨年度までの特別活動の研究によりつけた力を、さらに“誰もができる”を目指して実践を積み上げる。 経営のキーワード 『チーム第一小アップデート！ ー将来の自立を目指し、仲間と力を合わせようー』	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)	
画及び各学園の重点等を基盤として 学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計	教育課程 学習指導	1 読む力・書く力・確実に計算する力等、基礎学力を定着させるため、単元及び本時の目標が明確で児童にとってわかりやすい授業を計画的に進める。 2 知識・技能を用いて活用する力を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」による授業改善を積極的に進める。 3 感情をコントロールする(協調性)、集団の中で自分を律する(自制心)、自主的に粘り強く取り組む(やり抜く力)態度を積極的に育成する。	・学習指導部、研究推進委員会を中心に、基礎学力の定着のため、単元及び本時の目標が明確で児童にとってわかりやすい(具体的手立てのある)授業を工夫する。また、授業時間内や放課後学習、家庭学習を通じて学習の積み上げを進める。12月のDRTの標準得点において、昨年度よりさらに伸ばすことを目指す。 ・身に付けた知識・技能を用いて考える力(活用する力)を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善を特別活動の話し合い活動の視点から、積極的に進める。ICTを活用して思考力、表現力の向上を目指す。 ・協調性・自制心・やり抜く力を育成するため、指導のねらいを明確にした学級・学校の取組及び日々の指導を発達段階に応じて意図的・計画的に推進する。教科指導と生徒指導を一体化した授業づくりをすすめるとともに、特別支援教育の視点を大事に居場所のある学級・学校となるよう取り組む。	○今年度のDRTの結果では、学級平均では、特に国語において課題が見られた。しかし、算数において、一人ひとりが主体的に学べるよう工夫した授業(自由進度学習等)により力を伸ばすことができた。 ○学活の話し合い活動の研究を生かし、どの学級でもあらゆる授業の中でペアやグループによる小集団での話し合いや学級全体の学び合いを大切に進めている。その結果、多くの学級で主体的、対話的な学習が進んできている。 ○ICTを活用した学習がさらに進み、考えをまとめたり、表現したりする学習での効果が見られる。 ○特別活動の異年齢活動等も活用し、協調性・自制心・やり抜く力などが身につけてきていると感じる。また、日々の学級経営の中で肯定的な評価を大切に心理的安全性のある学級作りが進められている。 ○多様性を認め、居場所のある学校づくりに向けて、組織的に取り組み、「安心して学習ができる」の項目では91%以上の児童が肯定的評価をしている。

生徒指導	1 発達段階に応じた「友達と互いに理解し、信頼し、助け合う」気持ちを育成する指導を進める。 2 「不登校」、「いじめ」等の諸課題に対し、自己肯定感を高める等、未然防止と個に応じた支援による状況改善の視点において、積極的な生徒指導を充実させる。	・特別活動、学級活動、道徳科を中心に、全教育活動を通して道徳教育・人権教育を推進する。特に「主として人との関わりに関すること」[友情・信頼]についての指導を重視する。特に教室内の「心理的安全性」を目指すための様々な取組を進める。 ・教師が児童の良さをまた児童同士がお互いの良さを認めることで、自己肯定感を高め、自分の特徴に気づき、長所を伸ばそうとする態度を促進させる。学校・学級に一人一人の居場所があるように丁寧な取組を進める。	○学級活動や児童会活動、学校行事、人権教育の取組などを通して、集団での学び合いや支え合いができる学級が増えてきた。児童アンケートの「学校が楽しい」では、91%以上の児童が肯定的評価をしている。 ○不登校傾向の児童への対応として、常に居場所の確保に努め、また保護者とともに歩むことを大切にすることができた。その結果、少しずつ前向きに成長する児童が増え、長期欠席にはつながっていない。 ○いじめ等の生徒指導事象についても、トラブルはたくさんあるものの、確実な事実確認と保護者連携を通して、解決することができている。 ○児童アンケートで、自分には良いところがあると答えた児童がさらに増え約 89%だった。
健康（体育）・安全	1 全校的な体力にかかわる課題改善に向け、取組の充実と積極的な児童への指導、保護者への啓発により、心身ともに健康な体づくりに取り組む。	・体育の授業と運動し、期間を決め、集中的に朝マラソンや縄跳び等の取組を行ったり、計画的でタイムリーな児童への指導、保護者への啓発を進めたりすることで、体力（特に持久力）向上と休まず学校に来ようとする耐力（意欲）を高める。 ・休み時間の積極的な異年齢遊びを通して、安全に楽しく誰とでも遊べる経験を増やす。	○マラソン大会や縄跳びの取組等、体力づくりを全校的に進めることができた。 ○保護者との丁寧な連携を図り、子ども同士のつながりを大切にして居場所を創ることでどの子どもも学校に来ようとする気持ちを持ち、登校できている。 △コロナ禍で落ち込んだ体力的な面の課題は、まだ改善には至っていない。けがも多い。
(A) 特色ある学校づくり	1 昨年度までの特別活動の研究実践の成果をさらに積み上げ、誰もができる将来の社会的自立を目指した教育活動の在り方について、実践を重ねる。	・学級活動や児童会活動等の授業や活動の考え方や指導の在り方について理論研究を進める。また、すべての教育活動の基盤として安心して学べる学級となる人間関係づくりの指導方法を発達年齢に応じて身につける。 ・大宮学園の授業研究会や市小研の特活部の研修等で、積極的にこれまでの研究の成果を発信する。	○特別活動の研究や実践から、児童が主体的に自他を尊重して話し合い活動を進めることができ、温かな人間関係づくりの文化が根付いてきている。 ○大宮学園の授業研究会では、伸び伸びと自分の意見を伝え、友達の意見を聞き、子どもが主体となって話し合いを進める授業から、研究協議が深まった。
(B) 情報活用能力（ICT 活用）	1 電子黒板や一人 1 台のタブレットを活用した、授業改善を進める。 2 情報モラルについては、実際に使用しながら細やかに実態を把握し、課題についてはその都度よりよく使うためのルールを考えさせながら身につける。	・具体的にどのような教科や単元、場面等で活用しているか実践交流を行い、さらに使用範囲を広げながら効果的な活用を目指していく。 ・学園の取組の中でも、オンラインでの交流を行うなど、活用を図る。 ・「個別最適な学び」の実現を意識しながら、少しずつ家庭学習におけるタブレットの活用を進める。オンラインによる家庭学習についても、段階的に取り組む。	○全学年で、どのようなことに ICT が活用できるのかを実践研究することができ、児童の活用スキルも高まった。 ○学園での情報モラル研修会を行い、児童生徒だけでなく、保護者や教職員も最新のトラブル等について知り、正しく使う視点での指導に活かすことができた。 ○タブレットの持ち帰りを進め、オンラインによる家庭学習にも段階的に取り組んだ。
次年度に向けた改善の方向性	※一人一人の可能性を最大限引き出す教育を進めるため、学習の見直しをもったり学習したことを振り返ったりする等、児童が主体的に学習に取り組む（学びの自己調整）力を高める指導を進める。さらに、タブレットを活用して、日々の学習ともつなぎ個別最適な学びの実現を目指した家庭学習の取組を工夫する。 ※全ての子どもにとって心理的安全性のある学級・学校の実現を目指し、居場所のある環境で力を発揮できるように取り組む。 ※本校の落ち着いた雰囲気的基础に、特別活動で育ってきた異年齢のつながりや相手を思いやる気持ちなどがある。今後も、「誰もができる特別活動」の実践を地道にすべての学級で進める。 ※今後も保護者地域との連携を大事にし、地域を知り、地域の良さを生かした探求的な学びを進め、課題解決学習により子どもに力をつけていく。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立大宮南小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども ・自他を大切にし、思いやりのある子ども ・心身を鍛え、活動的な子ども 大宮学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。		○学園授業研究会・校内重点研究において生徒指導の三機能を生かした授業づくりを理論的・実践的に研究し授業づくりと学級づくりの一体化が進んだ。 ○肯定的評価を学校経営の重点におくことで、児童同士、教職員と児童、教職員同士の良好な関係性が高まった。 △家庭的な背景や発達上の多様な課題への指導支援、関係諸機関との連携による保護者・家庭支援を強化する。	安心感の中で一人一人が自分らしく挑戦し、確実に前進する学校づくりの推進～肯定的評価を基盤とした教育活動の展開～ 【4つの重点】 ・学習・生活における誠実な努力 ・約束を守り、自分も周りの人も大切にする心 ・知恵を集め、新たなものを生み出す力 ・児童・教職員の達成感と次への意欲
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
各学園の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び 学校教育指導の重点、学習指導	教育課程 学習指導	・重点研究教科を算数科とし、課題設定場面(導入)のあり方を重視する中で、児童の意欲や主体性、見通しを引き出す指導、探究的な学びにつなげる手法について研究を進める。 ・生徒指導提要の改訂趣旨も踏まえ、肯定的な評価に基づく居場所づくりを大切にしその中でコミュニケーション能力の向上を図り授業・学力向上の取組を推進する。 ・学びのパスポートの実施と効果的な結果分析のあり方等を研究し、個の学力状況・今後の経年変化や課題等の把握について整理する。	○授業研究会をとおして、従来の「授業者主体の授業」から「学習者主体の授業」への転換に向けてのポイントを児童の姿から学び合い、共有することができた。 ○学びのパスポート質問紙調査「学校では安心して学習することができている」は府平均を大きく上回り、安心感の中で学べている状況が窺える。 ○児童が積極的に発表や対話をする姿が見られるようになり、保護者アンケート「授業等でことばの力を育成している」は85%→91%に向上した(前年度比) △各種テスト・質問紙等から個の学力課題を整理し、より個別最適な学びや支援につなげる。
	生徒指導	・肯定的評価や安心安全な居場所づくり等と学級経営の連動についての研修を定期的に実施し児童のよさ、誠実な努力を引き出す指導を大切にする。 ・特別活動等において児童の発想や主体性を大切に、失敗の中から学び、工夫・創造し挑戦する力を高めるとともに自他の成長を喜び合える力を育成する。 ・SCやSSW、関係諸機関等との連携の中で、具体的な動きづくりにつながる役割分担のあり方や学校としての方針をより明確にし、対応の向上充実に努める。	○児童アンケート「学校は楽しい」は96%、保護者アンケート「人権を大切にした学級・学校づくりをしている」は98%と一定安心安全な学校生活を送ることができている状況が窺える。 ○各行事・取組において児童の発想や挑戦を大切にし高学年を中心とした異年齢活動の中でつながりが深まり所属感や一体感を高めた。 △肯定的な評価を基盤とした教育活動の中で一定安定した学級・学校経営を進めることができたが、家庭状況を背景とした個々の課題は大きい。SCやSSW、関係諸機関等との連携の中で学校としての改善構想を立て、協議・共有していく必要がある。

健康（体育）・安全	・運動の楽しさや喜び、心身の健康の大切さを感じさせる授業や活動を推進する。 ・望ましい生活習慣の確立と安全な登下校、事故防止に係る知識・実践力を高める指導を推進する。	・昨年度の体育指導力向上研究で学んだ「自分に適した場や運動の設定」を大切にし授業や体育的行事等の中で、自分らしく楽しみながら挑戦させる。 ・課題の見られるゲームやSNS視聴についての家庭ルール確立に向け、学園の取組を活用し啓発を行う。 ・安全な登下校への取組や交通教室等、PTA・学園・関係諸機関との連携を強化する。	○休み時間は多くの児童が異年齢で体育館やグラウンドで遊ぶ姿が見られる。昨年度の研究から授業の中で「自分に適した場や運動の設定」をすることが定着してきた。運動が得意な児童も苦手な児童も自分らしく挑戦する姿が見られる。 ○教職員による下校パトロールを強化しその中で実態把握とともに安全な登下校指導を進めることができた。 △児童・保護者アンケート「ゲームやテレビ等の視聴ルールがある」は81%→76%に低下しており、今後一層の家庭との連携、啓発・継続した指導が必要である。
特別支援教育	・個々の特性等を組織的に捉え共有することに努め、適切な支援をととして児童が学び合い、育ち合えるようにする。	・特別支援コーディネーターを中心に児童支援に係る部会を定例化し、現状や課題・手立て等について協議する中で、よりよい指導支援のあり方を探り、実践する。 ・特別支援教育に係る研修を充実させ、個別支援とともに通常学級における個と集団の支援のあり方について研究を進める。 ・具体的な方針に基づく保護者との面談を定期的に行い、児童の特性とともによさや成長を確かめ合う中で、合意形成に基づく支援を進める。	○児童支援に係る部会の定例化が図られ、配慮の必要な児童の様子や変化等の把握や保護者面談に向けた打合せ等ができ、安定した支援を継続することができた。 ○通常学級における支援についても校内研修会を設定し見立てや支援のあり方について学び合うことができた。 △保護者に課題面だけでなく、児童のよさやがんばりを日常的に伝える中で信頼関係を丁寧な築き、学校と家庭で支援の共有や見通しをもつことを大切にする。
情報活用能力 (ICT活用)	・授業における使用から質の高い活用に高めるための研究を進める。 ・家庭学習をはじめ広く教育活動における活用の手法を研究し個別最適な学びの実現を目指す。	・昨年度の ICT 活用研究で学んだ「単元指導計画や1時間1時間の授業の中で活用場面の構想」「児童に「何を見せ」「何に気付かせるか」の明確化」等の視点を日々の授業の中に落とし込み、質的向上を図る。 ・児童の考えや学びをつなぐツールとして ICT をいかに活用するかを研究する。 ・「整理」「探究」「予習」「補習」等、家庭学習における ICT 活用の視点を研究し学校での授業と家庭学習とをつなぐ。	○各教室で日常的に ICT を活用した授業が展開され、授業研究をととしてその質を高めることができています。 ○タブレットの持ち帰りによる家庭学習も定着してきており、効果的な活用の研究を進めることができた。 △学びのパスポート質問紙調査「ICTを使うことで他の人と意見や考えを共有しやすい」は府平均を下回り、ICTのよさを生かした意見交流の仕方をさらに研究する。 △大宮学園でも家庭学習のあり方が課題となっている。今後「自己調整力の向上」を目指す上で効果的な ICT 活用のあり方をさらに研究する。
次年度に向けた改善の方向性	・学びのパスポート等の効果的な活用をもとに、より個別の学力・学習状況の把握・改善を推進する。 ・肯定的な評価を基盤とした教育活動を継続し、児童にとってより心理的安全性や居場所のある教室・学校を目指す ・安心感の中で児童が考え、挑戦・協力し、失敗から学ぶことのできる主体性を育む学校行事や特別活動を推進する。 ・特別支援教育を中心に多様な課題への支援、関係諸機関との連携による保護者・家庭支援を推進する。 ・家庭での生活を「自己調整」する力を高めるための家庭学習のあり方を ICT 活用も含め研究し改善を図る。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立網野北小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。		○目標達成のための活動を仕組み、運営することができた。 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究を進めることで、非認知能力育成に焦点化した授業改善を図ることができた。 △学年があがるにつれ自己肯定感が低下しているため、児童の主体性を引き出す取組と肯定的評価が必要である。 △基礎学力の定着を図ることが更に求められる。	1 網野学園保幼小中一貫教育の「目指す子ども像」の具現化を図るため、他の保園小中学校一貫した教育を推進するとともに、全教職員が学校運営に参画する。 2 「児童が主体性とそうぞう力を発揮する学校」「児童のよさがつながる学校」を目指し、児童にとって居場所のある魅力ある学校づくりをすすめる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
諸計画及び各学園の重点等 を基盤として 学校教育指導の重点、 保幼小中一貫教育の 学習指導	1 「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育む教育活動を柱として授業改善を推進する。 2 生徒指導の4つの視点を生かした「わかる」「できる」「表現する」授業を通して「学びに向かう力」を育む。 3 振り返りを行い、自らの学びと成長を確認できる活動を行う。	1 「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究において、非認知能力を教職員と児童が共有し、効果的なギミックや仕組み方を通した授業研究を行う。 2 学習意欲を喚起する授業展開とねらいが明確で「わかる・できる授業」を目指し、身に付けた知識・技能を活用し考え、表現する中で、児童が学びあう授業研究を行う。 3 多様な学習形態や学力補充・家庭学習、個の興味や理解に応じた学習を更にすすめるためにICTを積極的に活用する。 4 単元を通して児童が学習の成果や自分自身の成長したことに気づき、次の学習や学びに向かう意欲につながられる振り返りを通した授業改善に取り組む。	○教育活動全般に於いて学校としてつけたい非認知能力を焦点化し取り組むことができた。 ○保護者アンケート「学校はわかるできるの授業をすすめている」の間に「よくあてはまる」昨年度比+15 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究を進め、焦点化した非認知能力におけるギミックブラッシュアップシートによる全担任の授業研究会を行うことにより授業改善に取り組んだ。 ○全学級でICT機器を活用した授業を実施した。オンラインの配信型の課題だけでなく、Teamやロイロノートに於ける他者参照を取り入れる等授業でのICT機器の活用が進んだ。 △効果的なICT機器の活用の研究とタブレットを活用したオンラインでの家庭学習を更に進めていく。

生徒指導	1 教育活動全体を通して、生徒指導の4つの視点を大切にしたい実践を行う。 2 いじめと不登校においては未然防止に重点をおき、組織的な対応を行う。	1 異年齢活動の充実を図り、児童が自ら気づき主体的に活動することで、達成感や充実感を感じ合い自他ともに大切にする安心・安全な「居場所づくり」に努める。 2 生徒指導部会・教育相談部会、いじめ防止組織の中で、児童の姿を共有し、児童の変化に気づき見逃さない校内体制を構築する。 3 不登校やいじめを含む問題事象については、迅速かつ丁寧な初期対応に努め、児童や保護者の思いに寄り添い対応をする。	○異年齢活動（行事・チーム遊びや掃除・委員会活動）に年間を通して取り組むことで、主体的・創造的な活動へと変容した。 ○週1回のいじめ防止対策委員会の中で全校児童の変化や気になる状況を校内及び家庭と共有し支援を行った。 △不登校（傾向）児童や家庭に対し、関係機関や専門家と連携を図り、児童や保護者の思いを大切にしたい支援を更にすすめる。 △学年があがるにつれ自己肯定感の低下がみられる。
健康（体育）・安全	1 積極的にチャレンジし、自らの成長につながっていることを実感する指導を進める。 2 基本的な生活習慣に関する児童の実践的な態度の育成を図る。	1 個に応じた目標や短期（各単元）目標を設定させ、目標児童が達成感を得られる取組を仕組む。 2 振り返りの中で、児童の相互評価や家庭との連携、指導者による肯定的な評価による価値付けを行う中で、自他の成長に気づき次への意欲を高める。 3 児童の成長の基盤となる生活習慣について、主体的実践的な態度の育成に向けた取組の充実を図る。	○授業だけでなく各取組等においても児童が目標を設定し、振り返ることを通して次につながる意欲を高めた。 ○家庭と連携し基本的な生活習慣の確立に向けて目標をもちながら取り組むことができた。 ○保護者アンケート「基本的な生活習慣の確立」の問いに対し「よくあてはまる」前年度比+8となった。
特別支援教育	1 児童一人ひとりの実態に応じた適切な支援を行う。 2 特別支援コーディネーターを中心とした組織体制の充実を図る。	1 すべての児童にとっての学びやすさ、生活のしやすさにつながる教育環境を整備する。 2 組織的なアセスメントを行った上で、支援を要する児童の教育的ニーズに応じた支援内容を検討し、保護者・児童と目標を共有しながら支援の工夫改善を図る。 3 特別支援コーディネーターを中心として関係機関と連携を進めるとともに、校内組織の機能化を図り、個に応じた支援の質の向上を図る。	○定期的な校内委員会や必要に応じてケース会議を開催し、個のニーズに応じた支援について検討し、全教職員で共有しながらすすめることができた。 ○年間を通じた保護者との懇談を通して、児童や保護者と目標を共有しながら指導計画と教育支援計画の見直しを図った。 △保護者アンケート「きめ細やかな支援」の問いに対し、「わからない・（あまり）あてはまらない」前年度比±0。
開かれた学校づくり	1 丁寧で分かりやすい情報発信と積極的な学校公開を進める。 2 PTA・地域との関係機関等との連携を強化する。	1 学校だよりや学級通信、ホームページ等で、学校の様子を発信するなど積極的な学校公開を行う。 2 PTAや地域の人材や関係機関等との連携を強化し、学校行事や授業参観を促進する。	○月1回の学校だより、ホームページの更新による情報発信を行った。 ○保護者アンケート「情報発信と学校公開」の問いに対し「よくあてはまる」前年度比+19、「PTA・地域との連携」の問いに対し「よくあてはまる」前年度比+16となった。
次年度に向けた改善の方向性	・「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究を踏まえた実践研究の更なる推進 ・「学びのパスポート」質問紙の分析を活用した探求的な学びへの授業の質的転換 ・個別最適な学習に繋ぐICT機器の効果的な活用の更なる推進 ・「振り返り」活動を位置付けた児童の創造的かつ主体的な活動の取組 ・家庭や地域への丁寧で分かりやすい情報発信と学校公開		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立網野南小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
網野学園基本方針より 1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。		○ペア・グループ活動を通した学び合いによる課題解決力や学習意欲の向上 ○非認知能力育成の研究による身に付けさせたい力の明確化と授業改善 ○異年齢活動を通したよい関係づくりと高学年のリーダー性の高まり ○保護者・地域と連携した安心・安全な登下校の確保 △読み解く力、活用力を高める授業 △規範意識の醸成 △家庭と連携した家庭学習や生活習慣確立の取組の充実		○みんなと学び合う学校 ・自分の考えをもち、他者に伝えたり話を聴いたりすることができる子の育成 ・仲間と共に力を高め合う子の育成 ○仲間とつながり合う学校 ・進んでチャレンジし、やり抜く子の育成 ・仲間と問題を解決しようとする子の育成 ○居心地のよい学校 ・人を思いやり大切にする子の育成 ・よさや違い、多様性を認めることができる子の育成 ○信頼される学校
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、及び各学園の重点等、保幼小中一貫教育の諸計画	教育課程 学習指導	・日々の様子や学力テスト等の結果から個々の実態を把握し、課題に迫る授業とその評価を行う。 ・授業や家庭学習にICTを効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を充実させる。 ・教科指導と生徒指導4機能を一体化させた授業づくりに取り組む。 ・教科横断的なカリキュラム・マネジメントを行い、地域教材を生かした探究的な学びを充実させる。 ・認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業の研究を行う。		○学力充実月間を設定し、研究授業を通して授業の改善点を整理したり、ICTの活用や計算力向上、家庭学習充実の取組みを行ったりして、主体的に学ぼうとする力を高めることができた。 ○認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業の研究が進み、育てたい力や大切にしたいことが明確になってきた。 △探究的な学びを意識した丹後学を仕組み実践することに課題があり、充実を図るためには計画的な研修も必要だった。
	生徒指導	・学級活動や異年齢活動を大切に、児童が安全・安心できる居場所やよりよい人間関係をつくるよう取り組む。 ・道徳教育や人権教育、国際理解教育、特別支援教育等を通して、個々のよさや多様性を認め合う心、思いやりや人権尊重の心を育てる。 ・教育活動を通して、児童の個性の発見、よさや可能性の伸長、社会性の発達を支援する。(発達支持的生徒指導の実践) ・早期に発見し対応できるよう、日頃から変化への気付きと情報共有に心掛け、組織的な動きを基本にする。(課題予防的生徒指導の実践)		○運動会や大縄大会、掃除等で異年齢活動を充実させ、高学年のリーダー性を高め、だれもが参加しやすくよりよい関係を築きくことができた。 ○日常的に教職員間で情報共有を行い、児童の様子や変化に早期に気付き、丁寧に対応することに努めた。 △不登校や別室登校の児童がおり、状況を常に確認しながら組織的に対応を行ってきたが、前進はしているものの解消には至っていない。

健康（体育）・安全	・進んでチャレンジし、やり抜く力を付ける。	・実態調査結果等を示しながら家庭と連携を図り、よりよい生活習慣の確立に取り組む。 ・外部講師を招いての専門性を生かした交通教室・非行防止教室・薬物乱用防止教室や訓練等を計画的に実施し、安全に対する意識を高める。 ・自分の目標に向かって粘り強くやり抜く経験と肯定的評価を重ね、自発的・主体的な力を伸ばす。	○長期休業明けを機会に、非認知能力を高めて生活習慣の定着を図れるよう家庭と共に取り組んだ。 ○交通安全や非行防止、薬物乱用防止、性被害防止の学習時には外部講師を招聘し、安全な生活について事例を交えながら学ぶことができた。 △熱中症の対策を強化すると、目標を決めて粘り強くやり遂げる持久走の取組みは厳しく、ねらいや方法等を見直していく必要がある。 △講師を招聘した火災や不審者対応の訓練ができていない。
情報活用能力（ICT活用）	・情報活用能力を伸ばす。 ・ICTを効果的に活用できる実践力を高める。	・ルールや約束事を理解した上で適切に使用したり、得た情報を活用したりできるよう、経験を通して児童に身に付けさせる。 ・目的を明確にしてICTを授業や家庭学習に活用し、その効果を把握し検証する。 ・授業に効果的に活用できるよう教職員研修や実践交流を行い、実践力を高める。 ・PTA活動と連携しながら、家庭でのメディアコントロールを高める取組を進める。	○タブレットを持ち帰り、個に応じたドリル学習等を家庭でも活用することが増えた。 ○各担任が試行錯誤しながら授業におけるICTの活用を実践するとともに、その交流を通して効果的な活用を学び合い、実践に生かすようにした。 △情報機器使用に関する状況調査の結果、本校児童の課題は大きい。児童や家庭へ実態を知らせ、より具体的に改善の取組を行う必要がある。
特別支援教育	・個の教育的ニーズに応じた指導・支援を実践する。 ・組織体制整備と機能化を充実させる。 ・よさや違い、多様性を認め合える心を育てる。	・特別支援教育コーディネーターを中心に、児童の実態把握や特性の理解、指導の方向性を全教職員で確認し合い、より適切な指導・支援を行う。 ・組織的な体制を整え、短・中・長期の目標を明らかにして支援計画や指導計画等を作成し実践する。 ・理解教育やすべての教育活動の場面を通して個のよさや違い、多様性に気づかせ、互いの頑張りを認め合い共に学び合おうとする心と態度を育てる。	○理解教育や人権教育を通して、個々のよさや違いを認め合うことの大切さを伝え、実践力を高めてきた。 ○毎週部会をもち、児童の実態を把握しながら指導や支援の方向性や手立てを検討し、全体で共有しながら進められた。 △保護者の思いに寄り添いながら、迅速で丁寧な対応を心掛ける。
次年度に向けた改善の方向性	○非認知能力を高める取組をさらに充実させ、本校課題の「仲間とつながる力、粘り強く取り組む力、チャレンジする力」を高めることができるかの見取りや検証、認知能力の向上との関係性を追究する。 ○課題や問題に自ら向き合い、解決していく過程を楽しみながら体験し、結果や答えを導き出していく授業づくりを大切にする。 ○個々のよさや違いを教職員も児童も認め合い、活動等をとおしてよりよい関係を築き、安全かつ安心して登校できて居場所がある学校づくり、学級づくりに取り組む。 ○保護者や地域、外部の方々と連携して児童を守り、育てる。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立島津小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 落ち着いた学校、学び合いのある授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。		○行事や学習など様々な場面で意欲的に活動する姿が見られた。不登校児も無く、多くの子どもたちが伸び伸びと生活できている。 ○今まで島津小学校で大切に指導してきたことが伝統として子どもたちに引き継がれてきている。(反応・関わり・自分事・ATV・BMW) ○学校全体として、教職員も子どもたちも一体となって取組を進めることができた。 △読書活動を高めたり、個別最適な学びで思考を深めたりする授業実践を進めていく。	生き生きと学び、いつでもどこでも児童が輝く楽しい学校～子どもたちに力をつける～ 1 「未来を拓く学校づくり」推進事業をもとに「認知能力と「非認知能力」を一体的に育む教育を推進する。 2 全ての教育活動において短期目標(合言葉)を位置づけ、「島小システム」による学校経営を進める。 3 教職員が安心して気持ちよく働ける職場にするとともに適材適所で校務を分掌させ、相互に関わり合いながら組織的に機能させる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学園の重点等を基盤として 学校 教育 指導 の 重 点 、 保 幼 小 中 一 貫 教 育 の 諸 計 画 及 び	教育課程 学習指導	・学園で目指す「これだけは!」を基に、育成したい非認知能力の行動指標が達成できるよう取組を進める。 ・基礎基本の徹底を図り、常に「やってみたい」「できた」「わかった」を大切に、意欲を高める授業を行う。 ・自ら考える力を伸ばすために、課題に出会う場面を大切にし、意欲的に疑問や問いを追究する力を育てる。 ・学園の家庭学習の手引きを基に、自分に必要な自主学習の在り方を考えさせながら家庭学習に向かわせる。 ・ICTを活用し、授業改善を進める。	○重点研究を総合的な学習の時間・生活科とし、探究的な学びとなるよう研究を進め実践を積み上げた。 ○△学年を超えて家庭学習の交流をすることで、家庭学習の目的を再認識し、質や量を改善する児童が見られたが、内容や取組方法の工夫が必要。 △非認知能力の中でも「自己調整」「積極的な関与」について育てていく。
	生徒指導	・生徒指導の4つの視点による学級づくりを進め、児童相互及び教職員との好ましい人間関係を育成する。 ・日々の子どもの様子を全教職員で見守り、情報交流を丁寧に行うことで、「いじめ」や「不登校」の芽を逃さない。また、常に起こり得ることを想定しながら危機感をもって教育活動を進める。 ・全ての計画に、短期目標(合言葉)を位置づけ実践する。 ・豊かな人間関係を育むために、異年齢活動を進める。 ・校内体制を整備し、児童の状況把握に努め、SCやSSW等外部機関と連携しながら未然防止を図るとともに、教職員の対応力を向上させるため研修の機会をもつ。	○問題事象等に、素早く丁寧に対応したことで、不登校児童も、重大ないじめ事象もない。学校が安定している。 ○合言葉は、目指す方向性がわかりやすく、取組の活性化に繋がった。 ○チームの取組や掃除で異年齢活動が活発になり児童の繋がりが深まった。 ○心の不安定な児童が見られたが、SCや家庭と連携を進めながら改善した。今後も各機関や家庭と連携し丁寧に指導を続けていく。

健康（体育）・安全	・網野学園「これだけは！」（家庭編）に基づく取組を他校と連携し進める。 ・健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、様々な取組を通して粘り強く活動する心を育てる。 ・安全・安心な生活をいとなむための対応力を育成する。	・網野学園「これだけは！」（家庭編）に基づき、PTAに働きかけ、家庭と連携した取組みを進める。 ・当たり前のことが当たり前でできる子どもを育てるために、基本的な生活習慣や日常的な学校生活、家庭学習等の1日の流れの確立を目指して粘り強い声掛けと保護者連携を進める。 ・苦手なことでもお互いに励まし合い粘り強く頑張ったことが「よかった」と実感できる取組を仕組み、自尊感情を高める。 ・日々の生活・活動を通して「安全」について事例を教材化して考えさせ、正しく判断できるようにする。	○お便りや学級懇談会で生活点検の結果やゲーム・SNSに関する内容について啓発・交流することができた。 ○自分の課題に焦点を当てた生活点検を実施し達成感と成就感をもたせた。 △いつでも、どこでも、誰にでも気持ちよく挨拶ができる児童を育てたい。 △基本的な生活習慣に課題のある児童が固定化している。特に、ゲーム・SNS等の改善に向けて継続的な取組を行うとともに家庭との連携を図る。
情報活用能力（ICT活用）	・総合的な学習の時間を中心に探究的な学びを一層重視した授業展開を工夫する。また、全ての教科で情報活用能力を育てることを意識する。 ・タブレットを活用し、子どもたちの能力・適性や興味関心に応じた個別最適な学びと協働的な学びを充実させる。	・ICT等の情報手段を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりする学習を行う。また、情報機器の基本的な操作の習得やプログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティについても学ぶ機会を設定する。 ・大きな画面で分かりやすく説明する一斉指導と、個々の習熟度に合わせた問題の解答や制作などを行う個別学習や子ども達同士で教え合い学び合う場面を効果的に設定するため、自分の実践を校内に発信するとともに、研修の機会を増やす。	○総合的な学習の時間を研究とし、新たな領域に一步踏み込み試行錯誤しながら取り組んだ。体験が子どもたちの思考を揺さぶる姿が見られた。 ○△タブレットを活用して授業を行うことが増え、児童も扱い方に慣れてきている。授業改善やより効果的な使い方について更に研修を行う。 ○△市の学力対策会議に全員参加し学びを深めた。今後も研修会に参加する等自己研鑽を行い、授業改善を図る。
特別支援教育	・特別支援学級を中心にした教育活動を全校的に進める。 ・支援を必要としている児童に対して、組織的な対応を進めるとともに、児童理解の力量を高める。	・特別支援学級についての理解教育を年度当初から丁寧に進める。 ・配慮の必要な児童に対して、アセスメント、個別の支援計画、教育支援計画を作成・検討し、組織的な対応を行う。 ・外部の専門機関と連携し、特性についての理解を深めたり、研修を行う中で知見を広げたりする。	○学園で統一した様式でアセスメント等を行い、全教職員で交流することで支援の在り方を確認し、実践できた。 △個に応じた具体的な支援方法について自己研鑽及び研修で学び合うとともに、特別支援教育コーディネーターを中心とした組織体制を確立する。
次年度に向けた改善の方向性	1 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業をもとに、「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育む教育を推進する。 2 探究的な学びへと質的転換を図るため、総合的な学習の時間及び生活科を重点研究とし、「主体的・対話的で深い学び」となる具体的な授業実践について更に研究を進め、学力向上を目指す。また、1人1台の端末を活用し子ども達の能力・適性や興味関心に応じた最適な学びと協働的な学びを充実させるとともに、教員のICT活用能力の向上を目指す。 3 外部の専門機関とも連携を図り、組織的・計画的な進行管理のもと教育的ニーズに応じた支援を適切に行う。		

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立橘小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ： 明るく元気に進んで学ぶ子 【知】 意欲的に学習に取り組む子ども み： みんななかよく支え合う子 【徳】 規範意識を持ち、仲間と支え合う子どもの：のびのび生き生きやりぬく子 【体】 粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども		○網野学園授業研究会を2月に本校で実施し、「未来を拓く学校づくり」に関わる研究成果を発表できた。 ○「認知能力と非認知能力の一体的な育成」を目指して、算数科を重点教科とした授業研究を深めることができた。 ○本校で育てたい非認知能力について協議し、教職員・児童で共有できる目標を設定することができた。今後、見取りや検証について協議していきたい。 ○組織的な特別支援教育を進めることで、個に応じた指導や合理的配慮により個々の児童や学級の安定が見られた。 △学力診断テスト等の分析や活用について十分な効果が得られず、方法や活用についての見直しとそれを活かした指導の改善に課題が残った。 △時間外勤務時間は、月平均4.5時間の目標を達成できたが、一部教員への負担が大きい状況があった。		【教育活動の目標】 「考えてつながり、最後までやりぬく たちっ子」の育成～目的意識と達成意欲を大切にした教育活動の推進～ 【教育活動の具現化に向けて】 た ちばなを好きになる あ ん心して自己表現できる学校を、みんなでつくる。 知： 知恵を磨く こ の成長を喜び、主体的に学ぶ力をつける。 徳： 場を大切にする。 あ い豊かな人間関係を築く力をつける。 体： なに事もやりぬく。 き り強くゴール(目標達成)を目指す力をつける。 「自立と支援の見極め」「風通しの良い職員室」 「認知能力と非認知能力の一体的な育成」 「働き方改革の推進」「学校・家庭・地域の連携」
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、各学年の重点等を基盤として 保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導	1 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善を行う。(非認知能力の育成) ・算数科を重点教科とし、研究推進部を中心とした組織的な授業研究を通して、非認知能力を育成する。 ・単元構想シートやギミックシートを活用した授業づくりを行う。 2 学力向上の取組を進める。 ・担任と専科教員、加配等の連携や、外部資源の活用により、個に応じた効果的な指導を行う。		○4回の校内授業研と、2回の学園授業研を通して、教科の指導内容と非認知能力の育成の両立を目指した研究を進めることができた。 ○網野学園共通のギミックシートや、研究推進部提案の振り返りシートの活用により、非認知能力育成のための指導の焦点化や、児童自身の非認知能力の意識を高めることができた。 △非認知能力の向上を、認知能力につながった成果として表れるようにしていく。
	生徒指導	1 豊かな人間性を育てる。 ・道徳の授業や人権学習の充実を図ることで豊かな人間性の基礎を培う。 ・地域とのつながりや外部講師等の活用により多様な人との関わりから豊かな人間性の素地を養う。 2 認め合える集団づくり ・学級経営の充実や、特別活動部、生徒指導部等の連携した取組によって、異年齢集団活動を通じた豊かな関わりを経験させる。 3 教育相談部、生徒指導部等の連携、機能化を図り、いじめ・不登校の未然防止・早期発見・解消を行う。		○改訂された生徒指導提要について校内研修を行い、発達支持的生徒指導についての理解を深めた。 ○地域の行事に参加したり、生活科・総合的な学習の時間での地域学習を積極的に取り入れたりすることで、地域の方との関わりを通して豊かな心の育成に努めた。 ○異年齢集団の活動では、各学年の発達段階に応じた目標をもって参加させ、振り返りを大切にした活動のサイクルによって豊かな人間関係の構築に努めた。 △発達支持的生徒指導の視点をより具体化し、学級経営の中に生かしていく必要がある。

健康（体育）・安全	1 目的意識をもって粘り強く取り組む意識を育てる。	1 主体的な児童の育成 - 児童が挑戦できる場の設定や、目標をもって取り組むための支援と肯定的な評価を大切にしたい取組を進める。 - 振り返りの場を大切に、主体的な姿を価値付けることで次への意欲を高める。 2 健康の維持・体力の向上 - 生徒指導部や養護教諭等が連携し、生活リズムを整える取組を進めるとともに、生活習慣等に課題のある児童や家庭に対して丁寧な支援を行う。 - 体力づくりの取組などを通して、児童が目標達成に向けて最後まで粘り強く取り組む力を付ける。	○生活点検の取組を、非認知能力育成と関連付けて見直し、児童それぞれが目標を設定して自己の生活リズムを意識できるよう工夫した。 ○マラソン大会に向けた休み時間の体力づくりの取組を、熱中症の危険の低い朝の時間に変更し、教育活動としての目的と、安全確保の両面から活動の改善を行った。 ○異年齢集団活動（春の運動会・大縄大会）の取組では、児童による振り返りを大切に、教職員による支援と、児童の主体性を活かした活動のバランスを考えながら取組を進め、教育的効果を高めた。 △児童主体の活動を充実させることによって、自己調整能力の向上につなげていく必要がある。
特別支援教育	1 個に応じた指導と、理解教育を進め、児童が安心して学習できる学校づくりを進める。	1 特別支援コーディネーターを中心とし、特別支援教育指導員の助言も生かした組織的な特別支援教育を進め、個に応じた効果的な指導を行う。 2 全校的な理解教育を充実させ、どの児童も安心して学習できる環境づくりを進める。	○児童個々のアセスメントを丁寧に行い、必要な支援と自立のための活動を特別支援教育部の組織を通して検討、設定することによって、児童に効果的な指導を進めた。 ○人権教育とも合わせて理解教育を進め、全ての児童にとって安心安全な学校となるよう環境づくりに努めた。
情報活用能力（ICT活用）	1 ICTを活用した多様な学習とコミュニケーションの能力を高める教育活動を進める。	- ICTの活用により、児童の興味関心を引き出す授業展開を工夫することで、学力とICT活用能力の向上を目指す。 - ICT活用につながる校内研修を充実させ、教員の活用能力を引き上げる。 - タブレットの持ち帰り学習を効果的に行うため、活用の幅を広げるとともに、児童への情報モラルについての指導を進める。	○ICTの利活用について校内研修を充実させ、夏休みを機にタブレットのオンラインによる持ち帰り学習を全学年で実施できるように取り組んだ。 ○ドリルタイムを使った全校一斉の漢字学習の取組を、プリントとタブレットの日替わりとすることや、隙間の時間を使ってタイピング練習の時間を設定することで、授業でのタブレットを使ったコミュニケーションスキルの向上に取り組んだ。 △校内研修を更に充実させ、教員のICT活用のスキルを向上させると同時に、授業の中での活用の幅を広げていく。
次年度に向けた改善の方向性	- 非認知能力を生かした主体的な学習活動と、目標の設定や振り返りの活用による非認知能力の向上に取り組む - 特別支援教育と人権教育を充実させ、理解教育を進めることで、児童が安心して学べる環境を整える。 - 教職員の人権感覚を高め、人権学習を柱としたより良い人間関係づくりの取組を進める。 - 生徒指導の4つのポイントを大切にしたい主体的な活動の場を生み出せるよう行事・取組を工夫する。 - 校内の重点研究を充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。 - 基礎的・基本的な内容の定着を図り、学力課題の克服を目指す。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立丹後小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
教育目標(丹後学園共通) 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、 未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 1 よく考え学ぶ学校 2 友だちと仲良くする学校 3 最後まで粘り強く努力する学校 4 家庭・地域のつながりを生かした学校		○研究推進部を中心に、京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会を1つのチャンスと捉え、全学年で研究授業を行うなど授業改善に向けて全教職員で取り組めた。 ○タブレット持ち帰り学習や、ICT機器を有効に活用した授業づくりを進めることができた。 △「主体的・対話的で深い学びの授業づくり」を目指して授業研究等に取り組み、一定の成果が得られたが、引き続き取り組んでいく必要がある。 △教育相談部を中心に不登校の未然防止や解消に努力を重ねてきたが、引き続き組織的に取り組む必要がある。	・再配置5年目となる丹後小学校が、安定した学校運営ができるように教職員全員でベクトルを合わせて取り組む。 ・認知能力と非認知能力の両面を見据えた確かな学力の育成を図る。 ・授業に生かすICT機器の有効な使い方の研究や、オンラインによるタブレットの持ち帰り学習の充実を図る。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
諸計画及び各学園の重点、保幼小中一貫教育の 学校教育指導の重点、学習指導	教育課程 学習指導	・「自ら学び、認め合い、高め合う児童の育成」を目指して、教科の指導と生徒指導が一体化させた授業づくりを進める。 ・各教科の授業において、自分の考えの発言や対話、言語活動を重視した指導を行う。 ・タブレットや電子黒板等のICT機器の有効な使い方を研究し、効果的に活用した授業づくりを進める。 ・オンラインによるタブレットの持ち帰り学習の充実を図る。	○授業研究部を中心に、教科の指導と生徒指導の実践上の4つの視点を一体化させることの視点を常に取り入れながら、全学年で研究授業を行うなど、確かな学力の育成に向けて全教職員で取り組めた。 ○校内研修等を行い、ICT機器を有効に活用した授業づくりの研究やオンラインによるタブレット持ち帰り学習を進めることができた。 △引き続き、確かな学力の育成に向けて取組を進める。
	生徒指導	・丹後学園の生活のきまりを守り、教師が児童の良さをまた児童同士がお互いの良さを学級活動や多様な異年齢集団での活動の中で、意識して伝えることで自己肯定感を高め、明るく積極的な態度を促進させる。 ・不登校・いじめの未然防止のために教育相談部を中心にアンテナを高くはり、情報を共有する中で、組織的な対応をチームで行う。	○「安心・安全な学校づくり」を大切にすることを常に発信し、一方的に「させる」のではなく、子供たち自らが作り上げるようにするために、「支える」ことを大切にしている指導を全教職員で進めた。 △教育相談部と生徒指導部を中心に不登校やいじめの未然防止等に努力を重ねてきたが、引き続き組織的に取り組む必要がある。

健康（体育）・安全	・全校的な体力にかかわる取組の充実と積極的な児童への指導を行い、学校を休まない強い体をつくる。 ・困難なことにも粘り強く挑戦していこうとする態度を育成する。	・運動会やマラソン大会等の行事と絡めながら、期間を決め計画的に体力向上の取組を全校で実施する。 ・体力テストの分析を行い、指導に生かす。 ・学級、学校での取組において個々のめざす目標を発達段階に応じて明確にしながら、ねばり強く挑戦する態度を高める。	○中間休みの体力づくりでは、マラソン大会に向けて、中間休みに5分間マラソンに取り組む等、体力の向上を目指した。 ○運動会やマラソン大会、スケート教室、小学校駅伝大会への取組、大縄大会等、感染症対策も行いながら実施することが出来、児童の力をつける取組になった。
危機管理	・3つの安全（生活・交通・災害）を大切にし、安心して安全な学校生活を送らせる。	・登下校時のにこにこカーの運行や、学校支援ボランティアとの連携により安全な登下校につなげる。 ・登下校のみならず、校内外のきまりを守らせ、交通安全を含めた安全指導の徹底を図る。 ・校内の危険箇所点検を行い、適宜、修繕などを行うことで教育環境を整える。 ・感染症の予防対策を徹底し、児童が安心して学校生活が送れるようにする。	○登下校時等に、にこにこカーによる校区内の巡回指導や学校支援ボランティアとの連携を行う事により、交通事故の発生等を抑えることができた。 ○新型コロナウイルス感染症が5類に移行する中で、校内の状況をみながらその都度感染症等の適切な対応を行い、児童が安心して学校生活が送れるように取り組んだ。 △校内の危険箇所の点検を行い修繕に努めたが、塩害による施設の劣化が激しく、修繕が追いつかない状況である。
開かれた学校づくり	・丁寧で分かりやすいタイムリーな情報発信を行う。 ・PTA・地域の関係諸機関等と連携した取組を強化する。 ・地域の人材、学校支援ボランティア等、外部人材の積極的な活用を図る。	・学校便り、学級通信、ホームページ等により学校の取組や様子をタイムリーに積極的に発信する。 ・PTAをはじめ関係諸機関等との連絡を密に取り、協力を得る。 ・地域の人材、学校支援ボランティア等、外部人材の積極的な活用を図り、教育活動の活性化と充実を図る。 ・読み聞かせボランティア・図書館指導員により、読書への興味を高め本好きな児童を増やす。	○学校便り、学級通信、ホームページの発信等により学校の取組や様子をタイムリーに発信する事ができた。 ○PTA本部を中心に、PTA活動を大変積極的に行っていただき、会員や児童にとっても有意義であった。 ○△学校支援ボランティア等、地域人材を積極的に活用し、学習効果をあげることができたが、特に3学期に入って、新型コロナウイルス感染症等の影響で制限された事もあった。
次年度に向けた改善の方向性	・生徒指導の実践上の4つの視点をふまえた「主体的・対話的で、深い学びの授業づくり」をすすめる。 ・児童の主体的な活動を通して、意欲と自己肯定感を高める。 ・非認知能力の研究を本校児童の実態と合わせて行い、児童に付けたい3つの力の育成や授業改善に生かす。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立宇川小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 ○目指す子ども像 (1)言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) (2)自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) (3)ねばり強く身体を鍛える子(体)		○国語科を重点教科とし、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業研究を、市の保幼小中一貫教育授業研究会の開催も視野に入れて推進できた。校内のみならず学園全体で協働的に実践をすすめられたことは大きな財産となった。また、例年行なっている学力向上の取組を確実に実施できた。少人数学級の良さを活かした学級経営や教育活動を推進できた △素直で気持ちの優しい児童の育成が進む一方、積極性に欠けたりコミュニケーション能力に課題のある児童も一定数いたりする。今後の課題でもある。 △学力については引き続き大きな課題として取り組む必要がある。個別最適な学びの実現により、誰もがわかる喜びやできる楽しさを味わうことのできる授業改善を追究する。	◇学習指導要領の目指す学力の伸長を目指し、さらに ICT 機器を効果的に活用した授業改善とともに、個別最適な学び・探究的な学習活動の増進に全校体制で取り組み、未来に生きる力の基盤づくりの取組を行う。 ◇家庭学習でのオンラインでのタブレット活用を活性化させる。 ◇子どもたちにとって安全で安心して過ごせる学校運営に努める。(いじめの解消、不登校の未然防止、人間関係、環境面) ◇特別活動や異年齢活動など子どもたちが活躍できる場面において、主体性・積極性を育み、互いを思いあえる楽しい教育活動を推進する。 ◇へき地・小規模校の特性を生かし、地域と連携した特色ある学校づくりを行う。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤とし	教育課程 学習指導 1 「できる喜び」「わかる楽しさ」を実感できる授業、主体的・対話的で深い学びを実現する授業を目指し、学力の定着・向上を目指す。 2 少人数であることの特性を生かし、個別最適な学びと協働的な学びの両立を目指す。 3 タブレット端末の活用と探究型学習の基礎を培う。	1 国語科を重点教科とした授業研究を全学級で実施し、モデルカリキュラムに示された“育てたい力”を育成する成果と手法を全ての授業実践に波及させることで、児童一人ひとりの確かな学力を育成するための授業改善を進める。 2 個々の学力課題を丁寧に分析し、児童の困り感に寄り添った指導を推進する。 3 読書活動、家庭学習の質の向上、ドリルタイムの充実などを図り、学力のベースづくりを継続的に行う。 4 家庭学習でのタブレット活用と家庭学習の在り方について研究を進める。	1 全学級において研究授業を実施し、国語科教育の指導研究並びに主体的・対話的な学びへの授業改善の取組を前進させた。学力充実に関する取組とも連携したタブレット端末の利活用や基礎学力の定着・向上を目指した取組を継続して取り組むことができた。(かがやきノート、計算チャレンジ、いつでも持ち帰り可、タイピングスキルアップ等) 2 高学年においては家庭学習への取り組み方の質的転換を図った。やらされる宿題から児童自ら取り組む家庭学習へシフトすることで、児童の家庭学習への意識改革を進めた。

生徒指導	1 自己有用感と自己肯定感の醸成を図り、進んで学校生活に関わろうとする態度を育成する。 2 人権意識の高揚と規範意識の醸成を目指す。 3 個に応じた支援の充実による状況改善を推進する。	1 特別活動や異年齢集団活動を通して、互いを認め合うことのできる望ましい人間関係を構築させる。 2 研修を充実させ、いじめ防止の取組を年間を通じて行うことで、いじめの早期発見・解消と安心できる友達関係を構築させる。 3 誰一人の取り残すことのないよう、個別の状況について分析・理解し、組織的な対応を行う。	1 児童自らが楽しく取り組むことを重んじた指導により、児童会・委員会活動がよりを推進することで、より活発で主体的に活動できる児童が増えた。 2 生徒指導提要の基本研修を実施し、現代の指導課題に合わせた生徒指導の在り方について、改訂生徒指導提要を使った研修を実施できた。 3 いじめ対策委の開催により、いやな思いをしている事象への早期対応ができた。
健康（体育）・安全	1 体力の向上と基本的な生活習慣づくり 2 安全に生活するための知識と判断力を身につけさせる。 3 将来の夢や希望に向かって何事にも粘り強く取り組むことのできるこころとからだを育てる。	1 体育科の授業や体力づくりの取組、外遊びの奨励を行い、健康に過ごせる体力づくりを行い、体力の向上を図る。「げんき貯金」の取組を計画的に行い望ましい生活習慣を身につけさせる。 2 日常の学校生活の中で健康に関する取組を継続して行い、健康に関する知識と判断力を身につけさせる。 3 キャリアパスポートなどの活用で、自分の将来に目を向けさせ、目標に向かって日々努力する大切さに気づかせる。	1 合同体育や休み時間等を使った5分間走、短縄跳びの取組を通して、基礎体力を向上させる取組を計画的に実施できた。 2 バドミントンや特活の外遊び GOGO キャンペーン、計画的な全校遊び等を実施し、全校みんなが楽しく遊びに集うことで明るい学校風土と外遊びや多様な遊びを奨励できた。 3 げんき貯金の取組では、基本的生活習慣の確立を図ると共に学年ごとに成果や課題を保護者に啓発できた。
特別支援教育	1 教育的ニーズや特性に応じた指導・支援を計画的・組織的に推進する。	1 サポート委員会を中心にした組織的で継続的な支援体制と見守り活動を、関係機関との連携を密に取りながら行う。	1 すくすく（特別支援・教育相談・教育支援）部会を開催し、SC・SSW との連携や家庭との懇談など組織的対応を推進した。
特色ある学校づくり	1 へき地小規模校の特性を生かし地域と連携した教育活動を進め、未来を展望できる児童を育成する。	1 総合的な学習の時間や生活科の授業などに地域教材・地域人材などを活用した学習を取り入れる。地域社会との交流や情報発信に努める。	1 アフターコロナとなり、海での遠泳やチーム遠足、地域を学習の場とし地域を学ぶ校外学習やG Tを招聘しての地域学習などを昨年度より多く実施できた。
次年度に向けた改善の方向性	・児童が学習の主体となる授業の質的転換の研究、さらに安心・安全な学校運営により、学力向上や生きる力の育成と児童の主体性や協働性を高め、少人数学級のよさを生かした学習活動とICT活用も取り入れた授業改善を目指す。 ・コミュニケーション能力・非認知能力を高め、自己表現のできる児童を育成する。 ・生徒指導推進上の4つの留意点を教育活動の基盤におき、社会性やコミュニケーション能力の育成を推進する。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立吉野小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)			
1 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくりを推進し、生きる力の確実な習得と、言語能力を高め、課題解決に向けて思考力を育む教育の推進		○年間を通じて生徒指導の3機能を生かした授業づくりを意識し、安定した学級経営を進めた。		1 児童の小さな変化を全教職員で共有すると共に、生徒指導の実践上の視点を生かした授業を基盤とした学級経営について、具体的な研修を行う。			
2 主体的に行動できる力と豊かな人間性を育み、個々が大切にされる心の教育を推進する。		○全学級で研究授業を行うことで、経験の浅い教職員の授業力の向上につながった。		2 発達課題のある児童が多い実態の中、ICT を効果的に活用し、児童が意欲的に授業に向かえるようにしていく。また、家庭学習での効果的な活用方法についての研究・研修を行う。			
3 学園の保幼小中一貫教育を、校種間における様々な取組等を充実させながら推進する。		○ICT を活用した授業は定着してきたが、家庭学で効果的な活用について研究・研修を深める必要がある。		3 学校適正配置に向けて小小連携の充実等、弥栄学園保幼小中一貫教育の更なる充実を図る。			
4 家庭、地域とつながり、信頼される学校、特色のある学校づくりを推進する。		○全学級研究授業に取り組むことができた。センターの出前講座を3回実施し、授業づくり、ICT の効果的な活用等について学ぶことができた。		4 教育活動について効果的な情報発信を行う。			
△課題が見られる学級等へは関係分掌を中心に組織的な対応をとることができた。							
評価項目		重点 目 標		具 体 的 方 策		成果と課題(自己評価)	
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 自己指導能力の育成を目指した授業づくり		1 生徒指導の実践上の視点を全ての教育課程に取り込んだ授業改善と学級経営を推進する。 (1) 心理的安心・安全のある学級づくりと授業づくりを通して、児童の学習意欲の向上を図る。 (2) 安定した授業スタイルの定着を図る。		○年度当初は、個々の学級で落ち着いた雰囲気が見られたが教育相談部、生徒指導部を中心に児童の変化を捉え、全体での情報共有を図り、早期に手立てを打つことで、児童が安心した中で、授業が行えている。	
		2 個別最適な学び、協働的な学びにつながる授業づくりの実践		2 個別最適な学び・協働的な学びにつながる、授業改善を推進する。 (1) ICT を効果的に活用した授業づくりと ICT の活用に係る研修の実施 (2) 出前講座の活用(国語)		○「教え込む授業」から「自ら考える授業」「協力して改題に取り組む授業」への改善が校内での授業研究会を通して進んできている。	
	生徒指導	1 生徒指導の実践上の視点を活かした学級経営の推進		1 共感的な人間関係の育成 (1) 課題解決に向けて、どうすればよいかを考え合える学級経営を進める。 (2) 自分と他者の言葉で伝えあえる雰囲気のある学級づくりを進める。		○学級内での対話場面の設定や異年齢活動の意図的な設定により他者を理解する力の育成が進んだ。	
		2 いじめや不登校の未然防止・早期発見と人権意識の高揚		2 いじめ等の未然防止や早期発見に努め、人権意識の高揚を図る。 (1) 学校適正配置に向けて好ましい人間関係の育成を図る。 (2) 学校内での情報共有体制を確立し、早期発見に努める(いじめ対策委員会の機能化)		○学校適正配置に向けて、弥栄小学校との交流学習など小小連携を通して、両校児童同士の理解が進んだ。 △児童に寄り添った支援等が十分とは言えず、長期欠席の者を出す結果となったが、該当児童、保護者とのつながりを大切に定期的な情報共有に場を設定し、学校復帰に向けた取組を行っている。	

健康（体育）・安全	1 食育の推進・健康な心と体づくりの取組 2 危機管理意識の醸成を図り、学校事故の未然防止に努める	1 年間を通した健康安全の取組を行う。 （１）食育指導と生活習慣の指導 （２）体力づくりの取組 2 教職員の危機管理意識を高め、事故等の未然防止、緊急時の迅速な対応に努める。（校内研修の実施）	○各種感染症の流行期における、注意喚起と感染拡大防止等早期対応により感染拡大を防ぐことができた。 ○コンプライアンスハンドブックを使用しての研修や受傷事故等を教材化した教職員研修や情報共有を図ることで事故等の未然防止を図る事ができた。
(A) 情報活用能力（ICT活用）	1 情報活用能力を向上・充実を図る。 2 情報モラルの育成を図る。	1 情報機器の学習における利便性や効果、活用方法についての研修を行い、教職員のスキルの向上を図る。 2 情報の精査・モラル指導など活用能力の向上に向けた取組を進める。	○△授業における情報機器の活用、家庭学習などタブレット型端末の活用やロイロノートの利活用に係る研修など、学習教具、業務改善に効果的なツールとしての活用が進んだが更に使用スキルの向上が必要である。
(B) 特別支援教育	1 特別な支援が必要な児童の課題・障害に応じた支援や指導方法の充実を図る。 2 家庭や関係機関との連携を推進する。	1 支援の必要な児童の各種資料の作成し、家庭と学校が共通確認のもと、指導を進める。 2 保護者面談を丁寧に行い、本人に合った支援や合理的配慮が行えるように、関係機関も含めた連携を図る。	○支援の必要な児童についての効果的な支援の方法等、組織的に取り組むことができた。また、保護者との面談を丁寧に行い、本人の課題に合った指導をすることができた。 ○支援の必要な児童の各種資料について整理を進める事ができた。
次年度に向けた改善の方向性	・学校適正配置計画により、本年度末で閉校となるが、次年度からの弥栄小学校での教育活動に本校での成果・課題をうまく反映させ本校の児童が不安と混乱なく、新しいスタートが切れるようにしていく。 ・コミュニケーション力に課題があり、自分の思いや考えをうまく伝えられない、発信できない部分の改善を図る為に、何が必要か、どのような授業改善が効果的かについて、更に研究・実践を進める。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立弥栄小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・知識と技を磨き、活用する子 ・自他の良さを知り、共に伸びる子 ・心身をきたえ、何事もやりぬく子		○どの学級もタブレットを活用した授業に取り組み、すべての児童がタブレットの活用に慣れ親しんだ。 ○問題行動に対して各教員の経験値等に基づいた指導がなされがちであったが、アセスメントを行うことで多面的な理解に基づく指導が行われるようになった。 ○感染症対策をすべての行事・活動に反映させることで、健康に関する児童の意識が高まった。 ○児童の内面に働きかける指導やSSW、SC等を活用したりすることで、発達の特長を踏まえた児童理解を行う雰囲気づくり・支援体制の整備を進めた。 △保護者との連携については、学級担任の裁量によるところが大きい。働き方改革の視点から、さらに学級担任を支援するための学校体制を構築していく必要がある。		1 確かな学力の育成 2 発達支持的生徒指導 3 健やかな身体の育成 4 特別支援教育の充実 5 人権意識の高揚
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)	
学校教育指導の重点、各学級の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 学力課題に対応した取組の推進 2 各教科等における言語活動の充実 3 学園課題・学校課題克服に向けた保幼小中一貫教育の推進 4 効果的なICT利活用の推進	①学力調査における質問紙調査と教科結果の関連性・学力結果の推移等を分析して焦点化し、効果的な活用方法を検討する。 ②発達段階(低・中・高)に応じた言語活動を充実させる指導を行う。 ③保幼小中一貫教育の接続学年における一貫性・連続性のある指導の推進を図る。 ④児童がICT端末を日常的に活用できる環境づくりと並行してICT端末を効果的に活用した家庭学習(オンライン)の取組の推進を図る。	○接続学年において、特に1年生については、園で培った学びを学校生活に生かす視点を学級経営に反映させることで1年生児童の円滑な生活につながれた。 ○学力検査結果を分析し、課題を中心に教員全体で共通理解を図り、学力補充の取組につなげた。 ○「タブレット活用検討委員会」という専門部を作り、タブレットの活用や持ち帰り学習等を促進させることができた。 △どの学級も単元のまとめ学習には言語活動を取り入れるなど、その充実を図っていたが、「言語活動の充実」に関する保護者アンケートの結果は、他項目と比べて若干低い数値となった。啓発が不足していたものと考ええる。
	生徒指導	1 自己有用感の育成 2 発達支持的生徒指導・不登校やいじめの未然防止、解決に向けた早期発見対応	①発達支持的生徒指導を基盤に子どもの意見等を取り入れた学級経営(特別活動)の推進を図る。 ②日常的に会議や職員室で児童の実態交流を行い、児童の不適応を少しでも早く発見し、問題が複雑かつ困難になる前に、チームによる支援につなげる。 ③保護者面談・家庭訪問等を積極的に行うことを通して直接、間接に信頼関係を積み重ね、問題行動の早期発見・早期対応につなげる。 ④気になる児童については、積極的にアセスメントを行い、なぜそのような状態に至ったのか、児童の示す行動や背景や要因、情報を収集して分析し、明らかにする。	○子どもの意見を積極的に取り入れる異年齢の集団活動を積極的に行うことで、多くの教員が子どもの発達を支える働きかけの重要性を認識することができた。 ○保護者との連携は、学級担任以外の教職員も電話連絡や家庭訪問を積極的に行い、学校体制を強化した。 ○「一人一人を大切にする」をキーワードに掲げ、子どもの内面理解や内面への働きかけが必要とされていることを教育相談部や特別支援教育部から発信し、児童理解を積極的に行う雰囲気づくりや体制整備に取り組み、児童の多様性を尊重する雰囲気が高まった。 △不登校傾向を示している児童に対しての様々な視点や要素を組み合わせた多角的なアセスメントを行い、対応の幅を広げているところである。

	健康（体育）・安全	1 体力づくりの推進 2 健康課題への対応	①自己のめあてをもって「やってみよう」という楽しく前向きな気持ちが生まれる体育授業の推進を図る。 ②新体力テスト結果の分析から本校における課題を把握し、課題となる運動能力を高めるための取組の推進を図る。 ③地元産食材や郷土食に係る学校給食を切り口に、食に関する知識や体験を広げ、食の選択や判断ができる力を育成するための取組の推進を図る。	○体育の時間にタブレットを活用することで、自己の運動技術を改善する機会が増え、運動に対して主体的に取り組める児童が増えた。 ○新体力テスト分析を行い、課題となる運動能力を明確にし、体育の授業に取り入れた。 △給食週間を通して重点的に食育に取り組んだが、学校給食と教科（社会科、生活科、総合的な学習）を組み合わせた実践的なカリキュラムにより、年間を通して食育を推進していく必要がある。
	特別支援教育	1 切れ目ない支援の充実 2 バランスの良い集団指導と個別支援の充実	①個別の指導計画、個別の教育支援計画を活用し、学校と保護者が将来を見据え、協働して児童を支えるための指導・支援を進めるとともに、学級担任以外の教員等と共通理解を図り、その協力を求めるための効果的なツールとして活用を図る。 ②日常的に通常学級担任等と通級指導担当と情報を共有し、通級による指導を通常学級での指導に生かす視点を持つ。 ③生徒指導部と連携し、未然防止の観点から個別支援と集団指導の2つの視点での対応を進めるとともに、発達障害等について考慮すべき事象に関しては、指導により自覚を促すやり方ではなく、きっかけや前後関係も含めて要因を分析し、児童の適切な行動変容へとつなげる。	○特別支援学級に在籍する児童を中心に、個別の指導計画、個別の教育支援計画等も活用しながら保護者に学校での取組や対応を明確に伝えることができた。 ○学級担任と常に情報交換を行い、通級指導教室による指導が学級においても継続されるように連携を図ることができた。 ○児童課題に対して、家庭環境・生育歴等からもアプローチすることにより、児童の多様性を尊重した指導が行われている。 △個別の指導計画、個別の教育支援計画の活用について、すべての教職員が理解を深める時間を確保することができず、けっかてきにそれらのツールは一部の教員のみにとどまってしまった。
	人権教育	教職員の人権意識の高揚	①OJT を活用して子どもや保護者の背景にある社会構造を具体的に捉える中で、教職員としての人権感覚を磨き合う。	○子どもの内面理解や内面への働きかけが必要とされていることを教育相談部や特別支援教育部から発信し、児童理解を積極的に行う雰囲気づくりや体制整備に取り組むことで、児童の課題に対して家庭環境・生育歴等の問題にもアプローチできるようになり、児童の多様性を尊重する指導や取組が現れるようになった。
次年度に向けた改善の方向性		①働きがいがあり、かつ健康的な職場づくりを進める。（時間的な余裕を生み出す） ②日常業務を中心に OJT を意識した教職員の人材育成を推進する。 ③保幼小中一貫教育を活用して不登校の未然防止や予防を意識した学校の取組を進める。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立久美浜小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し 意欲的に学び やさしい心 をもち 根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 (1) 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども(知) (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども(徳) (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して 取り組む子ども(体) 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」 ～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底②主体的に学ぶ力の伸長 ③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード「ポストコロナを受け【創造と協働】」的な業務推進		○成果 目指す児童像の各学級、事業への浸透や具現化が進んだ。 教職員の強み ・コミュニケーションが取れ、助け合える 働き方の見直し ・下校早める等働き方が見直される。 研究推進の動きとして、児童の主体性が向上した。 組織的な動きとして、運営委員会の意義が大きい。 不登校傾向児童が3年続きゼロで更新された。 ◇改善点 学校業務運営上の改善点 業務推進上、「何のための取組」なのか明確化にさせる。 事業の主体となる手立てを考え、支援する。 取組の途中で交流し分掌の仕事を一人で抱えない。 担当一人に任せない。 校外研修を伝達する。 児童や保護者の事を「話し確認し合う」 早めに計画準備し、近隣で声を掛け合う。 会議や研究会でグループ協議を入れ共通理解を図る。 「学校が楽しい」との回答児童の減少。	目指す児童像【久美浜小学校】 「つながり、たくましい 一生懸命な 久美っ子」 の育成 ～将来の社会的自立へ～ 特色ある学校、を目指す。 ①「主体的・意欲的に学習する児童へ」 ＝「探究的な学び」「主体的な学び」 ・「わかった喜び」を大切にする授業づくり ②「地域とともにある学校」づくり ・子どもの元気を地域に ・学校、社会教育、地域との連携、協働 ・「久美浜を支える人づくり」の取組 ③本物に触れ、出逢う「地域に開かれた教育課程」 ・外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験等 ・ICT(電子黒板、タブレット等)を効果的に活用した授業づくり ④研究推進のテーマ「生き生きと表現し、主体的に学習する子どもを育成する生活科の創造」～自分・人・地域が つながり、かかわる～教育活動 ⑤京都府小学校教育研究会生活科指定校として総合と共に (京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で)授業作りを発信 ・京丹後市小中学校給食研究会、レポート実践校の発信 ・リーディングDXスクール事業の効果的な教育実践
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画 及び各学級の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	「主体的・意欲的に学習する児童へ」 ①生活科・総合的な学習の時間の研究推進の動きで「探究的な学び」を通し、児童に思考力判断力表現力を培う学習内容を仕組む。 ②ICT(タブレット)の活用等を関連付けた研究を目指す ③「本物に触れ、出逢う【社会に開かれた教育課程】」 外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験等 ④地域の人的物的資源を有効に活用させていただく。 クラブ活動、授業の外部講師、読書支援ボランティア等	○生活科・総合の研究推進で授業改善を図り教員の実践が大いに進んだ。 ○人的資源の有効活用で「本物に触れる教育」を推進し児童の心に響く実践が進み、子ども達の目の輝きが多く見られ豊かな心を育んだ。
	生徒指導	生徒指導4つの視点を土台とした学級経営 指導の重点化 ～「学び高め合う授業」と「支え認め合う学級」 ①生徒指導の4視点を生かした学級経営と授業作り ②児童の居場所・絆づくり(集団、体験活動) ③不登校傾向、いじめ等を全校一致した組織的指導 ④特性、学習進度に応じた個別最適な学びの場作り	○学園の動きと連動し生徒指導の4視点意識した動きで児童の主体的な児童会活動が一層進んだ。 △保護者、地域との連携によるあいさつを身に付けることができなかった。 △不登校傾向の未然防止に向けより一層家庭と連携していく。

健康（体育）・安全	何事も最後まであきらめずにやり通すたくましい強い心を育てる。	目指す児童「たくましい 久美っ子」につながる具体策 ① 校訓「一生懸命」を意識した教育活動を推進する。掃除を協力してする子どもを育てる。 ・根気強く、一つのことを最後まで協力して行う態度を育てる。 例 朝マラソン、縄跳び、休み時間遊び ②日常生活を当たり前により切る子どもを育てる。 5分前行動や「あいすつくろうよ」：生指上の行動の本校キーワード」の具現化を一層図る。 ・基本的な生活習慣、家庭学習、日常的な学校生活等、 ③運動に親しみ、体力の向上を図る。（朝マラソン等） ④家庭と連携し、基本的な生活習慣、望ましい食習慣の育成を図る。	○朝マラソンやマラソン練習、大会からたくましく頑張ろうとしている姿がみられ伝統的な本校の強みを進められた。 ○安心安全な環境作りが進んだ。（事故災害報告なし） △家庭での生活習慣の数値が例年低いため家庭との連携が必要である。
開かれた学校づくり	社会に開かれた教育課程の実現に向けたカリキュラムマネジメントの推進を図り「地域とともに育つ学校」を目指す。	特色ある学校「地域とともにある学校」づくり本物に触れ、出逢う「地域に開かれた教育課程」 ①子どもの元気を地域に発信する ②学校、社会教育、地域との連携、協働（PTA、公民館、民生委員、区 等） ③「久美浜を支える人づくり」の取組 ④情報を関係機関、家庭・地域に適切に提供し信頼される学校づくり HP、便り等 ⑤外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験 等 ・ ICT（電子黒板、タブレット等）を効果的に活用した授業づくり	○研究指定の実践から「地域をテーマ」にしていることで自ずと「地域とともにある学校作り」が年間を通し実践できた。・外部講師の依頼（水源の森調査、米作り、地域調査、保育所との連携、読書ボランティア 他） △引き続き継承する。
特色ある学校づくり	研究推進のテーマ「生き生きと表現し、主体的に学習する子どもを育成する生活科の創造」～自分・人・地域がつながり、かかわる～教育活動 京都府小学校教育研究会生活科指定校として市域・府域・全国へ・（京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で）授業作りの発信 ・京丹後市小中学校給食研究会、レポート実践校の発信・・・ ・リーディングDXスクール事業の効果的な教育実践	①生活科指定初年度として、総合的な学習の時間と共に全学級授業公開により授業力を磨き、探究的な学びの深化を図る。 ②京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で発信 ③リーディングDXスクール事業を有効活用 ④HPの更新を定期的に行う。また、授業参観、PTA会議、懇談会等で積極的に情報の公開を行う。 ⑤新型コロナウイルス感染症にも継続的に配慮し今年度ならではの有機的な実践。「創造と協働」の視点 ⑥児童主体の企画・運営を率先し取り組ませる。 ⑦ICT活用を今まで以上に推進させる。家庭とオンライン、児童朝会、健康教育、保護者アンケート ⑧不登校傾向のゼロ維持のスキルを継続発展	○研究推進の動きにより教員の授業スタイルが変化し、結果子ども達自らがより主体的に課題を解決しようとする動きが活発に見られた。 ○リーディング実践により市域、学園内に広く実践を発信でき指定校の役割を若干果たすことができた。 △今後も家庭との連携を丁寧に進める。 △ICT活用の今まで以上の促進。
次年度に向けた改善の方向性	～令和6年度～ 目指す児童に向けて 私たち教職員は・・・ 重点 生活・総合の研究推進を核に、全ての教育活動において、「つながり、たくましい、久美っ子が主役で」育み、将来の社会的自立を目指します。 1. 子ども主体の授業観へ 教師が「教える」授業から学習者が「学び取る」授業へ 2. 地域・保護者の支えを生かした教育活動（「本物に触れ、出会う教育課程」） 3. 安定した学級経営：生徒指導の4つの視点を生かす 4. 特性を踏まえた支援：個別最適な学び 指導の個別化 + 学習の個性化 5. 斬新で、支え・相談し合える風通しの良い職員室 6. ICT活用をできる学年・できる教科等今まで以上：子ども主体 授業改善 7. 異年齢活動の発展継承で子ども主体の児童会活動：チーム活動 等 8. 校訓「一生懸命」を意識した教育活動		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立高龍小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
学習・生活に生き生き取り組むたくましい子どもの育成 — アセスメントを踏まえた系統的な指導 — 1 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) 2 集団での学びの質の向上(学級づくり) 3 家庭学習習慣の定着		○重点研究の国語科の授業研究や個別の課題に応じた補充指導等により、児童の見える学力について一定の成果が見られた。 ○児童が落ち着いて学校生活が送れるようになり、話を聞いたり我慢強く課題に向かったりできるようになってきた。 △行為者が特定できず問題事象が連続するケースがあった。不登校児童について継続して働きかけを行っているが、改善につながりにくいケースを残した。	授業づくりと学級づくりを両輪で回し、学級経営の基盤を固める。3つの目ざす子ども像として児童・教職員・保護者への意識づけを図る。 ◇自分なりの考えをもつ子ども ◇言葉を大切にする子ども ◇ねばり強く取り組む子ども
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、諸計画及び各学園の重点等を基盤として 教育課程 学習指導	①言葉を大切にしたい指導を行い言葉の力や粘り強く取り組む力を育てる。 ②個に応じた指導・学力補習体制を整備し、基礎・基本の定着を図る。 ③主体的に学習に向かう力、対話をする力、学習したことを自ら活かせる力を伸ばす。	①国語科を重点とし「言葉の力」を高める授業研究では、『研修を支援する』教師力向上支援事業を活用する。 ②朝ドリル、放課後補習を設定し、全校体制で基礎学力の伸長を図る。また、学習支援ボランティア等を有効に活用する。 ③ICTを有効に活用しながら、課題解決に見通しを持ったりできたことを振り返ったりして、主体性・話し合う力・既習内容を活かす力を伸ばす授業づくりを推進する。	○教師力向上支援事業を活用したことにより、重点研究を積み上げる形で整理しながら進めることができた。 ○放課後や夏休みに複数体制で補習を行い、課題改善に向けた学習指導を行うことができた。 ○書き方、家庭科など実技単元において学習支援ボランティアに入ってもらったことで、個別的なきめ細やかな指導を行うことができた。 △ICTを使うことはできたが、学び方を高めるレベルまではいかなかった。

生徒指導	①自分や友達のよさを認め合い、自己肯定感を高める。 ②友達の名前を正しく呼び、発達段階に応じた「思いやり」の心を育成する。 ③学校生活で支援を必要とする児童へのきめ細かな支援を行う。	①児童の良さががんばりを肯定的に受け止められる学級づくりを進め、一人一人の児童の自己肯定感、学校や学級での安心感につなげる。 ②中期学校目標を設定し、児童に目的や見通しのある学校生活を送らせる。また、「考えて行動することについて児童に問い続ける。 ③正しい言葉、やさしい言葉かけをしたりすることで、児童相互のつながりを深める。 ④不登校児童については、ケースに応じて情報共有と対応を行う。児童や保護者が見通しを持ったり意欲が高まったりするような働きかけを継続する。	○年間を通して、現状の課題を焦点化した目標設定によって、全校的な取組ができたことで、児童の意識が高まった。 ○「3つの児童像」は、児童に対して学期ごとに自己評価させて意識させた。主要な行事における目標にも絡ませることで、つける力が明確にされた指導につながった。 「伝える」「協力」「絆を深める」児童の達成度が高かった。 △不登校に関しては、SC・SSW・麦わらと連携を取りながら進めたが、決定的な方策を仕組むことができず、日常的な対応を続けることしかできなかった。
健康（体育）・安全	①年間を通した体力向上の取組、家庭学習の充実、生活習慣改善の指導・支援を家庭と連携して推進する。	①学園共通の家庭学習がんばり週間等の取組を活用し、家庭学習の習慣化、生活リズムの安定を図る。 ②感染症予防・事故防止については、集団生活のマナーとして必要なことを指導する。	○朝マラソン朝縄跳びは、運動会やマラソン大会とリンクさせたことにより、積極的に取り組む児童が多数だった。 △感染症による学年閉鎖をせざるを得なかった。
(A) 危機管理	①日常的な情報共有を徹底し、早期発見・早期対応を徹底する。	①管理職が積極的に情報発信することで、報告・連絡・相談・確認を教職員に徹底する。気づいたことは情報共有として取り上げ、安心安全を自ら作り出す意識を持たせる。	○素早い報告・連絡ができる体制・意識は、組織として重視されている。 △課題のアセスメントについて、児童・保護者・教員という多角的なとらえ方が弱くなりがちである。
(B) 人権教育	①教職員の人権意識の向上を図り一人一人の児童を大切にした教育活動を推進する。	①日常的に教職員や児童の言動に注意を払い、気づきを投げかける。校内研修等の充実により人権意識の高揚を図る。	○旬間・月間のような集中指導では、目標を意識した行動をとることができる。 △呼び捨て・思いやりのない言葉が少なくはない。
次年度に向けた改善の方向性	I C T利活用によって成り立っていく授業イメージを教職員で共有していく。研修等の設定により落としていく面とボトムアップで授業実践を広げていく面の両面からより確実に迫っていく。「学校として伝えたいこと」について、より適切で迅速な方法で発信していく。地域との連携の在り方について、学園運営協議会や公民館からの情報をいただきながら新たな姿を探っていく。不登校についてS C ・S S Wはもとより、行政との連携を丁寧にとりながら、改善に向けて中期的見通しをもって取り組んでいく。		

(別紙様式1)

令和5年度学校評価自己評価報告

学校名〔京丹後市立かぶと山小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 久美浜学園教育目標 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 2 めざす児童像 (1) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子 (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子		1 「主体性」を発揮するための土台となる「安心感」を醸成させる。各学級における「安心・安定」「基礎学力」について具体的に取り組み、改善を目指す。 2 昨年度に実践された「かかわり合い」を視点とした教育活動を継続・充実させ、新たな取組を創造しながら、児童の「主体性」の基盤となる「安心感」の醸成を目指す。 3 「不登校」の解消に向けて、①安心感の醸成、②基礎学力の定着、③状況把握と見立ての検討に取り組んでいく。	「安心感の中で失敗しても挑戦できる」学校を目指して 1 「トライ&エラー」できるための安心感を醸成する。 2 正しい価値が通る落ち着いた学級経営を大切にする。 3 教育活動を通して「自分事として捉える」ことを視点とする。「振り返り(評価)」の機会の設定と充実を図る。 4 明確な目標を持ち、具体性・計画性・合意性を意識し、組織や過程を活かした教育活動の推進を目指す。 5 指導観を学び合い、コミュニケーションを大切にする。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)
学校教育指導の重点、 各学級の重点等を基盤として 保幼小中一貫教育の諸計画及び	教育課程 学習指導 1 主体的な学びに向けた授業づくり 2 基礎基本の定着を図る取組の充実	(1) 児童が主体性を発揮できる学習課題や単元ゴールを設定した授業づくりを推進する。 (2) 単元を見通して、取得させたい学習内容を明確にした「わかる」授業づくりを推進する。 (3) 「主体的な学び」についての評価研究を推進する。 (1) 放課後の補充学習において、異年齢での教え合い等、学び直しを含め、取組内容の工夫・改善を図る。 (2) 家庭における学習習慣及び生活習慣の確立、家庭学習の内容や取り組み方法の工夫・充実を目指す。	○単元ゴールを目指して既習内容の理解を進め、児童が主体的に取り組めるよう年間を通じて授業づくりを進め、さらには「主体的な学び」の具体的な評価の視点を研究できた。 ○他学年とのつながりと学び直しをねらい、「つながりスタディ」を各学期・週時程に位置付け、年間を通して取り組んだ。 ○各学級のタブレットの活用が浸透しつつあり、学習面・活動面等、様々な場面で活用が見られた。 △安心感を醸成させるための落ち着いた学級経営についての交流・協議を継続し、安心感の中で主体的に学ぶ力を向上させる。 △家庭学習を含め、学習習慣の確立や付けたい力を明確にした取組の検討を行う。
	生徒指導 1 安心と安定のある学級経営の充実 2 望ましい人間関係を築く力の育成 3 「いじめ」「不登校」等の未然防止に向けた日常的な指導及び相談活動の充実	(1) 生徒指導の4視点(自己存在感・共感の人間関係・自己決定の場・安心安全な風土)を活かした学級経営を推進する。 (2) 肯定的評価や価値付けの積み上げにより、お互いの良さががんばり、失敗を受け止め、認め合える集団づくりを行う。 (1) 様々な異年齢活動や教育活動において、「つながり」を大切な視点とした内容作りを行い、児童主体の取組を通して、価値を見出したり、高学年のリーダー性を発揮させたりして、好ましい人間関係を育成する。 (1) 児童の状況を日常的に把握し、組織体制の中で情報の共有や見立て、方針を確認し取り組んでいく。 (2) 不登校の未然防止に向けて、講師を招聘する等、専門的な観点を踏まえた具体的な取組を推進する。	○きまりを増やすのではなく、児童の判断力を高める指導を大切にしてきた結果、大きな問題事象もなく、全体的に落ち着いた学校生活を送ることができた。 ○児童相互の「つながり」に視点を当てた「ペア掃除」「つながりスタディ」「きょうだい遊び」「チーム給食」等の異年齢活動を行い、互いに成長を喜び合う姿を多く見る事ができた。 △不登校傾向児童の支援・対応について、見立てと取組の工夫(本人と家庭・学校等との関係づくり等)を検討しながら、継続的に取り組む。 △学級経営に係って、「安心感の醸成」に視点を当てた校内研修を行う等、児童が安心できる学級づくりを継続する。

健康（体育）・安全	1 規則正しい生活ができ、健康で安全な生活を送ることができる児童を育成する。	(1) かかわり合いを大切にしたい体力づくりを行い、主体的で継続した取り組む態度を育む。 (2) SNS講習会や保健指導を年間に位置付け、メディアコントロールの力を身に付けさせ、基本的な生活習慣の確立を目指す。 (3) 登下校の安全に対して、安全ボランティアの方々との連携や定期的な通学班会等により、把握と指導を行う。	○ペア学年での朝マラソンを行い、励まし合いながら取り組み、マラソン大会当日も互いに応援し合う姿が多く見れた。また、見学者0名で参加者全員完走できた。 ○昨年度に引き続き、養護教諭による年長児へのメディアコントロール指導、3・4年生へのSNS講座等、系統的な指導ができた。 ○登校時刻の整理を、安全ボランティア・保護者・バス会社と連携して児童と共に行い、改善につなげることができた。 △通学班やその班長との連携を図り、日常的な把握と指導を継続する。
特別支援教育	1 配慮を要する児童への合理的な配慮を心がけ、適切な支援を充実させる。	(1) 配慮を必要とする児童の状況やその支援のあり方について、継続的に共通理解をしたり校内研修で深めたりする。 (2) 通常学級に在籍する支援を要する児童について、特別支援教育指導員と連携した個に応じた支援を行う。 (3) スクールカウンセラーやまなび生活アドバイザー、市臨床心理士等との外部と連携し、その専門的な見立てをもとに、配慮を要する児童への適切で有効な支援の仕方を探る。 (4) 丁寧で継続的な面談を通して、保護者と支援の方向性や今後の進路についても確認し合い、適切な就学相談を行う。 (5) 保幼小中の接続期において、具体的・有効的な状況把握や支援の継続・充実を図る。	○特別教育充実指導員の配置により、困り感をもつ児童へ細かな支援を行い、その子の意欲につなげることができた。 ○児童の支援に対して、保護者と継続的な面談を行い、具体的な状況や取組を共有し、適切な就学に結びつけることができた。 ○特別支援に係る研修（就学相談の意義・流れ等）や指導（人権教育との関連含む）を行うことで、教職員・児童の特別支援の理解を促進することができた。 △今後も、支援の必要な児童に対して、保護者と支援の方向性や具体的な取組を共有し、共に考える姿勢を継続していく。 △通級指導担当も含め、特別支援教育に係わる外部連携をより深め、多面的に児童を見立て、支援につなげる。
開かれた学校づくり	1 家庭・地域にひらかれ、家庭や地域と協働する学校づくりの推進	(1) 授業参観や行事への参加、小まめな家庭訪問や電話連絡等、保護者との連携を密にする。 (2) 学校・学級だよりやホームページを活用し、学校や児童の様子等、積極的に情報発信し理解を得る。 (3) 学校評価や保護者アンケートを計画的に実施するとともに、行事や取組の感想を活用し、学校改善に活かす。 (4) 地域の人材や資源（高等学校、企業、学校支援ボランティア等）を活用した教科学習等に取り組み、地域の方とのつながりを広げる。	○感染症の拡大はあったが、延期等の対応をしながら、行事や取組を実施することができ、肯定的評価として表れていた。 ○不定期ではあるが95回のホームページの更新を行い、26628件のアクセスがあった。(2/21現在) ○生活科や総合的な学習の時間を中心に、校区内外に出向き、地域教材や人材を活用する機会が増加した。また、各取組や学習活動等でも外部人材を活用することができた。 △外部評価や保護者アンケート等を参考にして、保護者（PTA）と学校と共有しながら改善方を検討していきたい。
次年度に向けた改善の方向性	1 これまでの久美浜学園のキーワードである「主体性」を育む土台づくりのために、「トライ＆エラーができるための安心感の醸成」の経営方針を継続させる。そのために、各学級において、「安心・安定した学級経営」「基礎学力の定着」について、方針に係わる視点での校内研修等、具体的に取り組み、一歩ずつの改善を目指す。 2 本年度に実践された「つながり」を視点として教育活動を充実・定着させると共に、その「つながり」を保護者・地域・学園に広げる等、新たな取組を創造しながら、本校の教育活動の充実を目指す。 3 本校の課題である「不登校」の解消に向けて、①「つながり」を通した安心感の醸成、②「基礎学力」の定着、③教職員・児童・保護者との具体的な信頼関係づくり、④継続的な状況把握と具体的な見立ての検討、等に取り組んでいく。		